

II B地区の調査

5) B区の遺構と遺物 (図版・3・4・8)

a) 基本層序 (第78図、図版42)

A区の東側に位置する調査区で、全長約105mを測る範囲である。層位は基本的にA区に対応し、最下層には明青灰色小～中礫層(8層)がひろがる。上面高は調査区の東端で、T.P.約19.5m前後を測り、傾向として東方に上昇している。次に砂礫上に黄色粘土(6層)と明緑灰色細礫混り粘土(7層)が堆積している。黄色粘土層は589-ORの両側に確認され、厚さ約1.8mを測る。黄色粘土層は、①縄文時代後期の土器(1、2)を包含する②幾層かに分離できる、の諸点において後述するC区の黄色粘土I・IIIに対応すると考えられる。しかし、本調査区では黄色粘土層自体589-ORに分断されるなど層位的に不確定要素が多く、結果的には分層を避け「黄色粘土」と概括した。7層は589-OR内で部分的に観察された土層で、縄文時代前期末～中期初頭の土器(3)が検出されている。

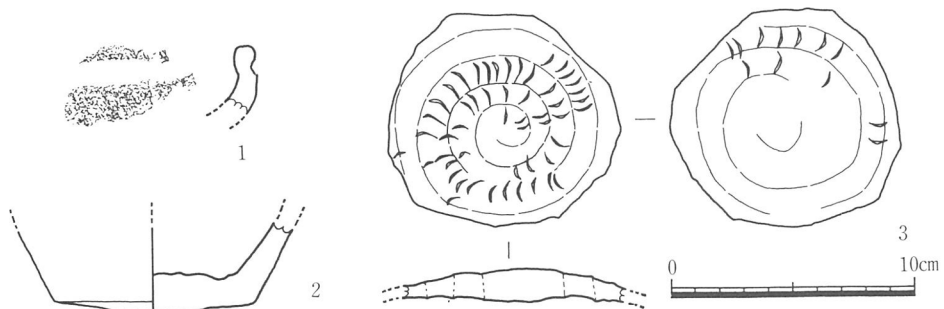
その後の堆積は、黄色粘土を基盤に走行する589-ORの埋没過程に係りを持ってくる。589-ORの最終堆積は黄橙色粘土(2層)で、黄色粘土層の最上層明黄褐色粘土(6-a層)と高さにおいて整合する。

遺構検出面は先の2層と6-a層になる。主たる遺構には、弥生時代の自然河川、溝、流路、時期不明の掘立柱建物、柱穴群、柵列、土壇等がある。概して遺構密度は低く、その傾向はC区で一層強くなる。

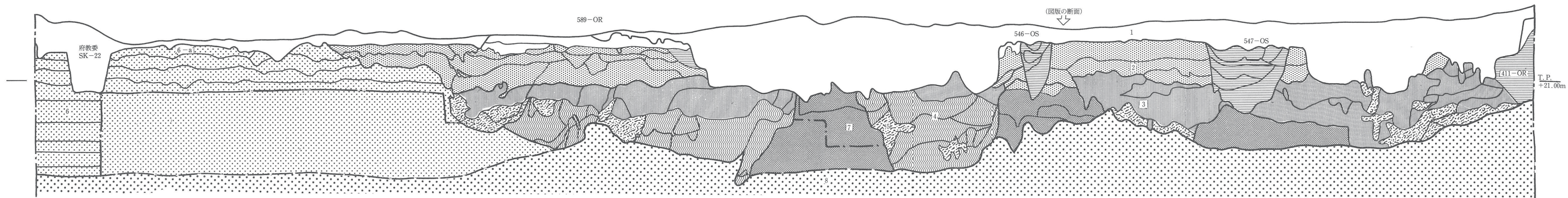
b) 遺構各説

〈縄文時代〉

B区においては、縄文時代の遺構は検出されなかったが、黄色粘土および明緑灰色細礫混り粘土縄文土器が数点出土している。

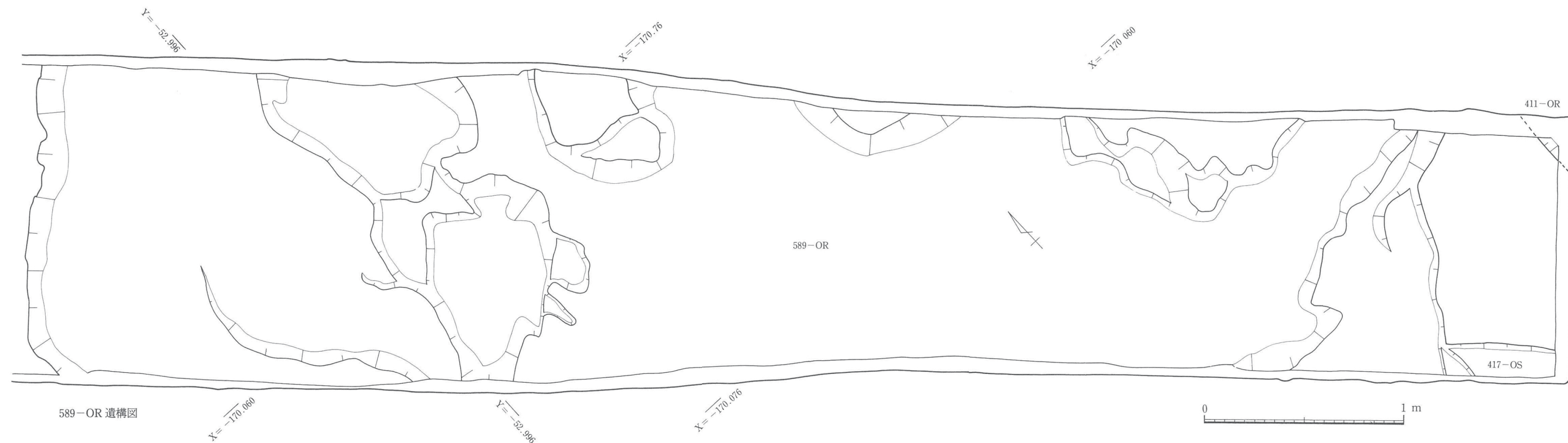


第78図 B区 黄色粘土・明緑灰色細礫混り粘土出土土器 (S=1/3)



B区北壁断面図 (S=垂直1/40、水平1/200)

- 1. 盛土
- 2. 7.5YR7/8黄橙色粘土 (589-OR 上層)
- 3. 5 Y6/1灰色粗砂~細礫 (589-OR 下層)
- 4. 7.5Y6/1灰白色粗砂 (589-OR 中層)
- 5. 自然木・植物遺体集積
- 6. 黄色粘土
- 6-a. 10YR6/6明黄褐色粘土
- 7. 10GY7/1明緑灰色細礫混り粘土
- 8. 10BG6/1明青灰色小~中礫



第79図 B区 北壁断面図・589-OR平面図

縄文土器（第78図、図版75）

(1) 6層出土。無紋鉢。口縁部は短かく外反し、端部は丸く終わる。端部直下には一条の沈線が走る。後期前葉か。(2) 6層出土。底部、凸底で胴部へ直線気味に伸びる。後期中葉か。(3) 7層出土。底部、凹底で縁辺部は欠損。粘土紐を左回りに巻きつけて成形しており、内外面ともに連続する爪の圧痕が観察される。色調は灰褐色。前期末葉～中期前葉か。

〈弥生時代〉

当該期の遺構には、黄色粘土層を基盤に走行する自然河川（589-OR）と、その埋没後その上面黄橙色粘土層を基盤に走行する流路がある。本調査区西端付近における道路擁壁部の調査では弥生時代中期の土壌が検出されている⁽²⁾。今回、特に関連する資料は積極的には見い出せなかったが、この事実を考慮すると本調査区には、弥生時代中期と後期の遺構面が存在したことになる。

イ) 自然河川

589-OR（第79図、図版42～44）

調査区を横断する自然河川で、幅約73mを測る。深度は最深部で約2m以上、平均して約1.5m以上を測る。河床は明青灰色小～中礫層に達し、一部明緑灰色細礫混り粘土層が島状に残る。堆積層は基本的に3層に分離できる。第1層は黄橙色粘質土で、第2層との接点付近は漸移的にシルト質に変化する。部分的には炭化物層もみられる。第2層は灰色粗砂～細礫層で、間層としてシルト質層や植物遺体集積層が重層的に観察される。第3層は灰白色粗砂の単一層で、直径15～30cmの流木を多量に含む。

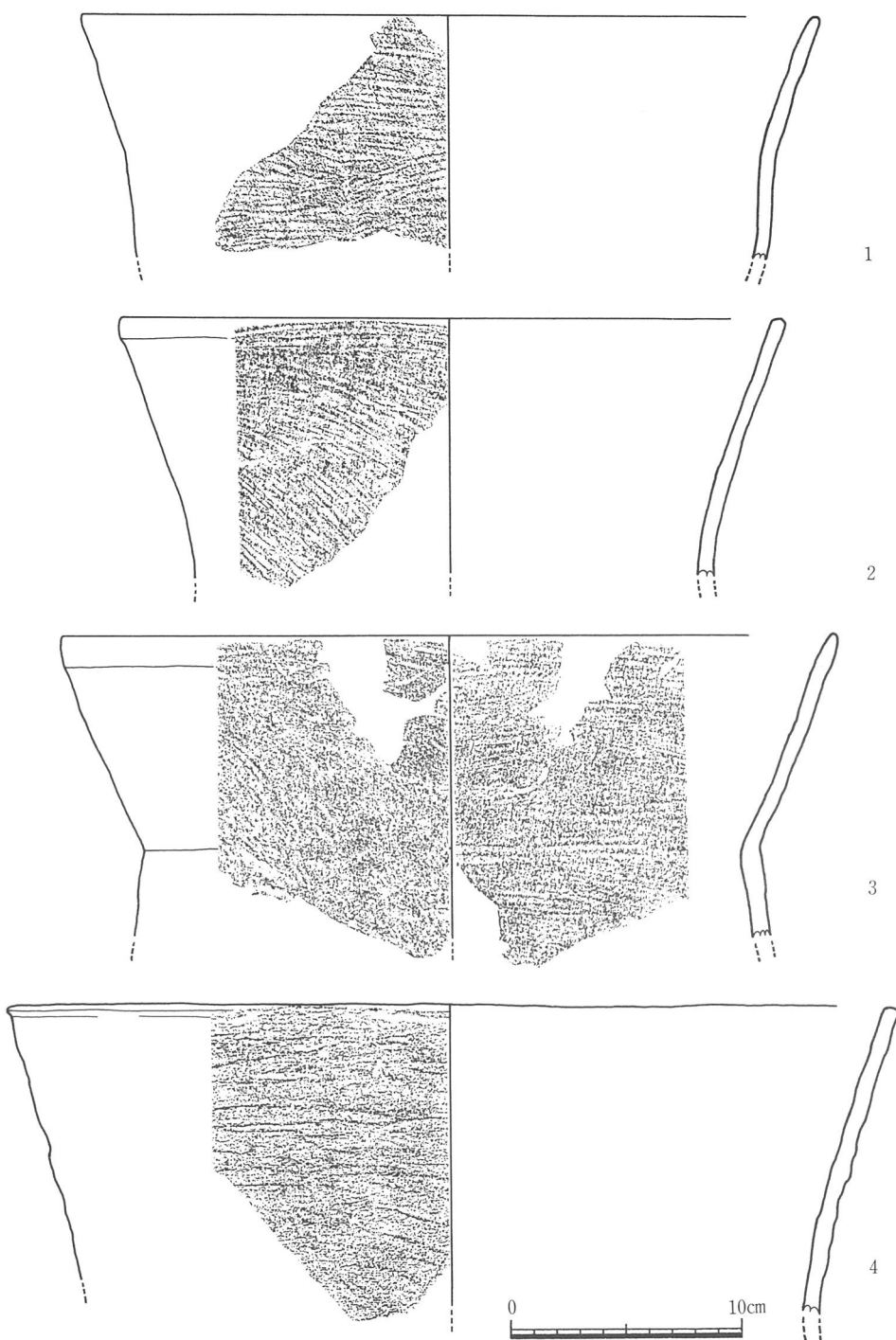
出土遺物は土器のみで、木器、石器等は未検出。出土土器には縄文時代後期から弥生時代後期までの時間幅が存在する。遺物の層位的処理は不可能だが、①第3層は縄文時代後期、晩期の諸型式に限定される②第1～2層には畿内第I様式から第V様式までの土器が包含されている、という特徴が指摘できる。以下、縄文土器と弥生土器に分けて記述する。

縄文土器（第80～82図、図版75～78）

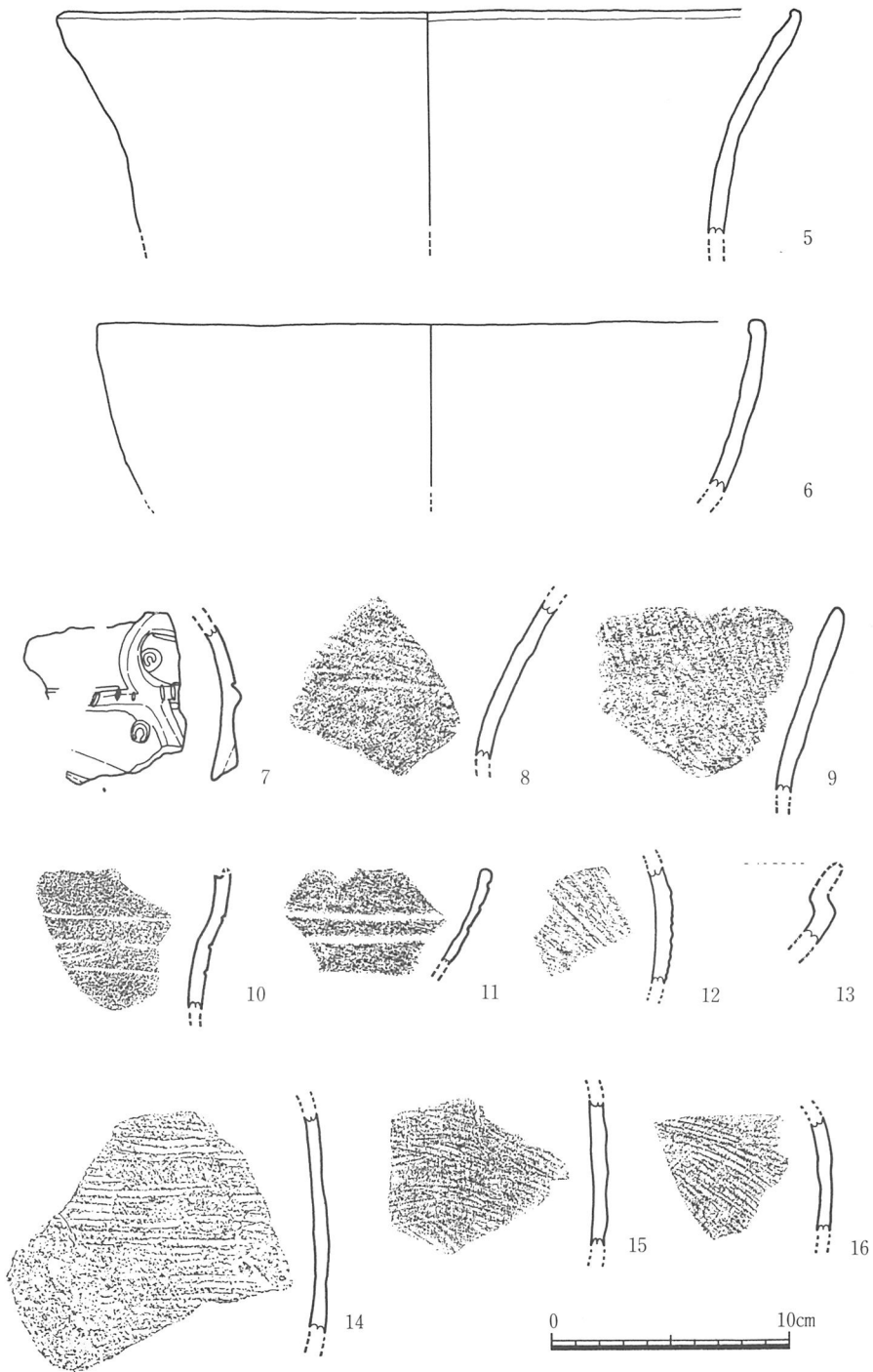
後期と晩期の資料である。全て破片で検出。

〔後期〕後期中葉から後期後葉の範疇に収まる。器種では粗製無文深鉢が多く、他に有紋鉢、浅鉢がある。又、搬入品として生駒西麓産が数点ある。

粗製無文深鉢（1～5、8、9、12、14～16）。口頸部と胴部破片である。口頸部の外傾度が増し、北白川上層式3期から元住吉山II式の範疇に収まると推定される。ただし、胴部破片には晩期の資料が含まれている可能性もある(14)。(1)口頸部。復元口径32cm。胴部よ

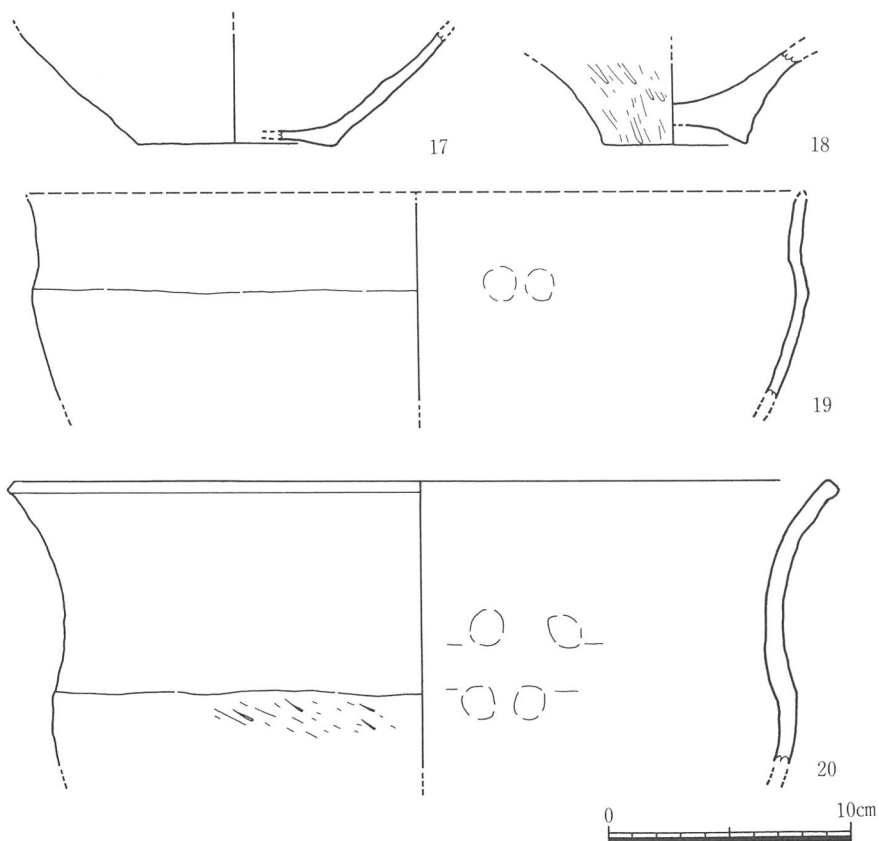


第80図 B区 589-OR・出土土器(1) (S=1/3)



第81图 B区 589-OR·出土土器(2) (S=1/3)

り緩やかに外開きに伸び、口縁端部は丸く終わる。内外面とも巻貝調整。器厚は6～7mmを測る。外面に煤付着。褐灰色を呈す。(2)口頸部。復元口径29cm。大きく外反し、口縁端部は厚みを増し丸く終わる。内外とも二枚貝調整。器厚は6～7mmを測る。褐灰色を呈す。(3)口頸部は胴部より屈曲し緩やかに内湾し伸びる。復元口径33cm。口縁端部は丸く終わる。内外とも巻貝調整。器厚6～8mmを測る。煤付着。黄灰色を呈す。(4)口頸部。復元口径38.5cm。斜上方に直線気味に伸び、口縁端部は外方向に少し肥厚し終わる。外面は巻貝調整。内面は板状工具による調整。器厚は6～7mm。外面に煤付着。明褐灰色を呈す。(5)口頸部。外傾度が高く、口縁端部は内方に丸く肥厚する。外面はナデ調整。内面は巻貝調整で、部分的に植物枝茎によるナデが観察される。器厚は6～7mm。灰黄褐色。(8)口頸部。大きく外反する。内外面とも巻貝調整。器厚6～7mm。外面煤付着。色調は暗灰色。生駒西麓産か。(9)口頸部。厚手の作りで、口縁端部は丸く終わる。外面は原体不明の条痕調整。内面



第82図 B区 589-OR・出土土器(3) (S=1/3)

はナデ調整。器厚は5～8mmを測る。(12)胴部。外面は二枚貝調整。器厚6～7mmを測る。煤附着。灰黄褐色を呈す。(14)胴部。外面は二枚貝調整で、内面はナデ調整で平滑に仕上げられている。器厚は4～5mmを測る。外面には厚く煤附着。黒褐色を呈す。(15)胴部。内外面は巻貝調整。器厚6～7mmを測る。灰褐色を呈す。生駒西麓産。(16)胴部。外面は二枚貝調整。内面は原体不明の条痕調整。器厚5～6mmを測る。色調は褐灰色。生駒西麓産。

有紋深鉢(7、10、11)。(7)胴部と推定される。内外面ともナデ調整。胴部には、粘土紐を水平方向に貼り付け、さらに縦方向に「S」字状を呈するように貼り付けている。「S」字状の内方には上下対称的に円形竹管を施し、水平方向の粘土紐上には刻み目を入れている。また、水平方向の粘土紐の裾には部分的に沈線を走らせている。器厚5mm。生駒西麓産か。後期中葉北白川上層式3期か。(10)口頸部。内湾気味に短かく伸び、口縁端部上面に走る沈線が途中で切れることから山形を呈すると推定される。口頸部と胴部の境には3条の区画沈線文が走り、下段の区画は斜行沈線文で充填されている。器厚5～6mm。北白川上層式3期か。(11)口頸部。口縁端部は外く終わり、その下方には2条の平行沈線が走る。器厚3～5mmを測る。後期後葉。

浅鉢(6、13)。(6)は口頸部。復元口径28cm。口頸部は内湾し、端部は内方に丸く肥厚する。内外面ともナデ調整。内面には炭化物附着。器厚6～7mm。灰褐色。(13)口頸部。「S」字状を呈し、外面は条痕調整。内面はヘラミガキ。器厚7～8mm。色調は黒褐色を呈す。

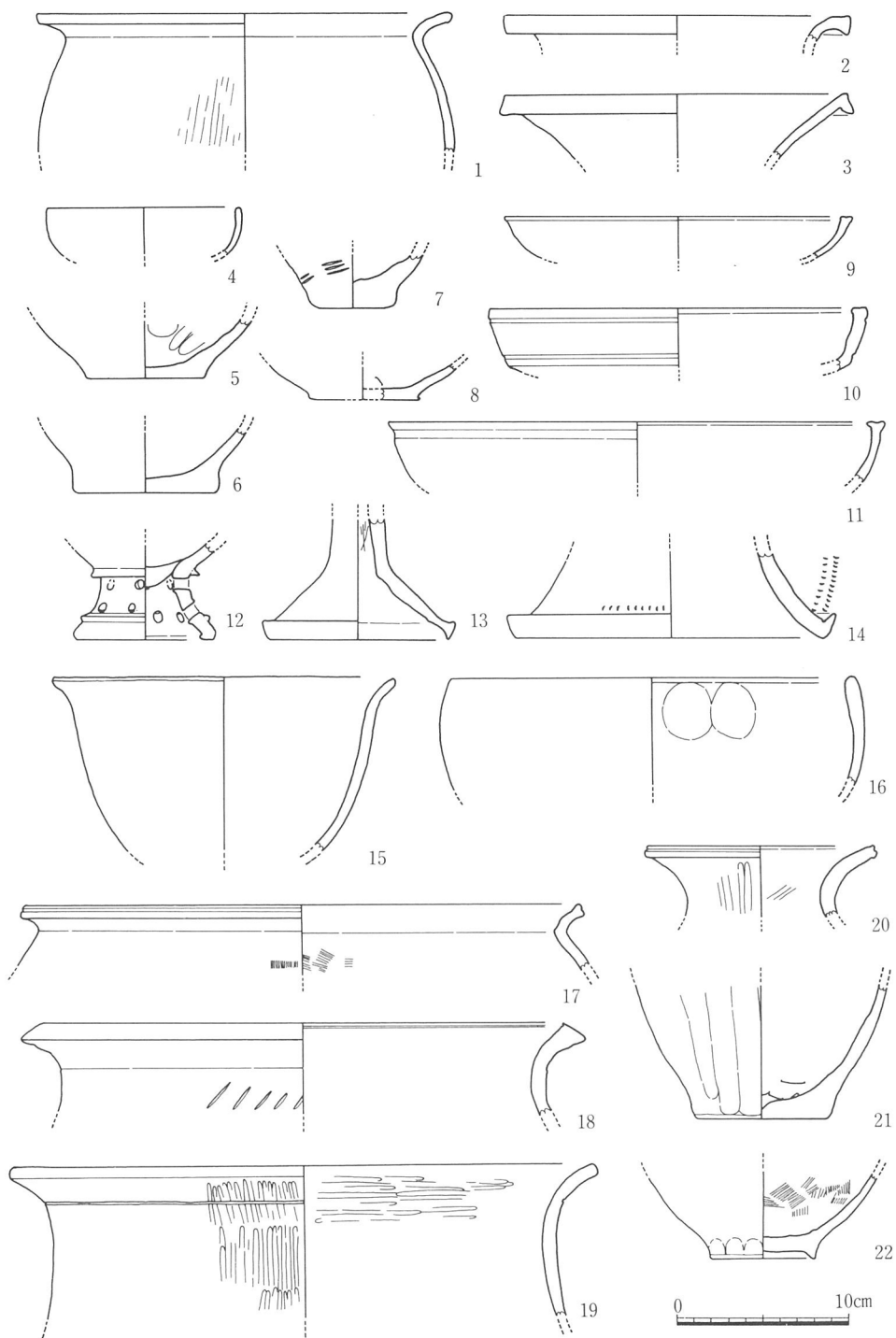
〔晩期〕深鉢と底部がある。後期資料に比較して少量である。⁽³⁾

深鉢(19、20)。(19)口頸部。復元口径32cm。胴部との境に段を設け、少し内傾した後に直線気味に短かく伸びる。口頸部の調整は不明。体部外面は巻貝調整。内面は原体不明の号痕調整の後ナデ調整。器厚は4～5mm。滋賀里II式。(20)口頸部。復元口径34cm。少し内傾した後、強く外反する。口頸部の内外面はナデ調整。胴部外面はヘラケズリの後ナデ調整。外面に煤附着。器厚5～6mmを測る。淡黄色を呈す。滋賀里III a 式。

底部(17、18)。(17)は扁平で復元底径9.5cmを測る。底面が少しあげ底になる。内外面ともナデ調整。内面に炭化物附着。器壁は薄く3～5mmを測る。灰黄褐色を呈す。晩期中葉か。(18)は深鉢の底部と推定される。底径6cmを測る凹底。外面はヘラ削り。内面はナデ調整。色調は褐灰色。晩期中葉か。

弥生土器(第83図、図版78、79)

畿内第I様式から第V様式までであるが、その内でも畿内第V様式と池上遺跡で云う第三-IV様式が多い。全て破片。搬入器に生駒西麓産がある。⁽³⁾



第83图 B区 589-OR • 出土土器(4)

畿内第Ⅰ様式。 壺と甕がある。ともに新段階。壺(19)第2層出土。口頸部残存。頸部との境に一条の沈線が走り、口縁部は緩やかに短かく外反する。内外面とも緻密なヘラミガキ調整。色調な灰黄褐色。胎土は石粒の頻度・粒度とも高く粗い。甕(15)第2層出土。体部上半残存。体部は緩やかに内湾気味に伸び、口縁部は少し外反し端部が丸く終わる。外面には煤が付着し、内面には炭化物が残る。生駒西麓産。

畿内第Ⅱ様式。 鉢(16)がある。第2層出土。口頸部残存。口頸部は内湾し、口縁端部は丸く終わる。摩耗が著しく調整は不明。

畿内第Ⅲ様式。 台付鉢(12)がある。第1層出土。脚台残存。脚台は「ハ」の字状に広がり、裾端部は平坦面をなし内方に丸く肥厚する。体部と脚台の境と裾付近には貼り付け凸帯が巡り、区画内は上下2段にわたり竹管文で飾られている。接合は円板充填による。色調は灰白色を呈する。

第Ⅲ－Ⅳ様式。 広口壺、高坏、甕、脚台がある。広口壺(2)第1層出土。口頸部残存。口縁端部は上下に拡張し櫛描直線文で飾られている。淡黄色を呈する。高坏には(9～11、13)がある。(9)第1層出土。坏部残存。扁平な坏体部で、口縁端部は内外に丸く肥厚する。摩耗が著しく調整等は不明。(10)第1層出土。坏部残存。坏口縁部は内湾気味に立ち上がり、上下2段に凹線が走る。口縁端部は平坦面をなし、内方に丸く肥厚する。ヨコナデ調整、灰白色を呈する。(11)第1層出土。坏口縁部残存。口縁端部の内外への肥厚が著しく、上端面の中央がくぼむ。胎土は粗く、色調は暗灰色。(13)第1層出土。脚部残存。脚裾部は大きく開き、端部は外傾し上下に拡張する。脚柱部内面にはしぼり痕が観察され、裾内面には一部ヘラケズリがある。摩耗が著しく外面の調整は不明。甕には(1、5、17、18)がある。(1)第1層出土。体部上半残存。口縁部は短かく外反し、端部は丸く終わる。外面は縦方向のヘラミガキ。全面に煤付着。生駒西麓産。(5)第1層出土。底部。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整。胎土は石粒の頻度が高い。(17)第2層出土。口縁部残存。口縁部は「く」の字状に短かく外反し、端面は凹線状にくぼむ。内外面とも刷毛目調整。(18)口頸部残存。緩やかに立ち上がり気味の頸部と短かく外反する口縁部。口縁端部は内傾する端面を形成し下方に拡張する。体部外面は左下りの叩き(2凹/cm)。灰白色を呈す。脚台(14)第1層出土。「ハ」の字形に大きく開き、端部は斜上方に拡張する。脚裾部は2帯の刻目で飾られている。剝離のため調整不明。

畿内第Ⅴ様式。 広口壺、鉢、甕などがある。前半から後半までの資料を含む。広口壺には(3、20)がある。(3)第2層出土。口頸部残存。大きく外反し、口縁端部は大方に拡張

する。摩耗が著しく調整等は不明。前半。(20)第2層出土。口頸部残存。大きく外反し、端面には凹線が走る。外面は縦方向のヘラミガキ。内面は刷毛目調整(4条/cm)。灰白色を呈す。前半。鉢(21)第2層出土。底部残存。平坦な底部より連続して体部へと続く。外面はナデ仕上げ。底部内面は指頭による凹凸がみられ、ヘラの当りが残る。黄橙色を呈する。甕(7)第2層出土。底部残存、突出度が低く、外面は左下りの叩き(3凹/cm)成形。色調は灰黄色。後半か。底部には(22、8)がある。(22)第2層出土。球形の体部に粘土紐を高台状に貼り付けている。内面は刷毛目調整(7条1cm)。(8)第2層出土。突出度が低く平坦面を呈する。生駒西麓産。時期不明。(3)第2層出土。坏状を呈するが、器形不明。摩耗により調整等不明。

ロ) 溝

417-OS

調査区の東端からC区西端にかけて検出した自然流路である。547-OSに先行する。幅1m以上、深度0.8m以上を測り、灰色粗砂～中礫を堆積層とする。遺物は未検出。

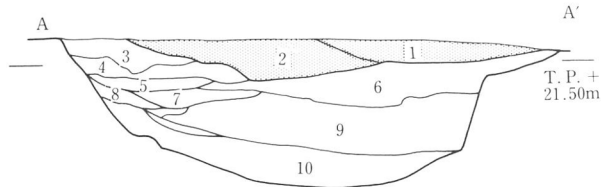
544-OS (第85図、図版45)

自然流路。545-OSと併走するが、北壁付近で形状が不明瞭になる。幅2m前後、深度20～30cmを測る。断面は緩やかな弧状を呈し、明黄褐色粗砂～細礫を堆積層とする。一部溝底には断面V字形を呈するくぼみが走る。遺物は弥生土器片が少量検出されている。

545-OS (第85図、図版45)

幅2m前後、深度20cm前後と544-OSと同様な規模を測る自然流路である、堆積層も基本的に544-OSと変化をみない。遺物には土器片がある。544-OSとともに546-OSに先行する。

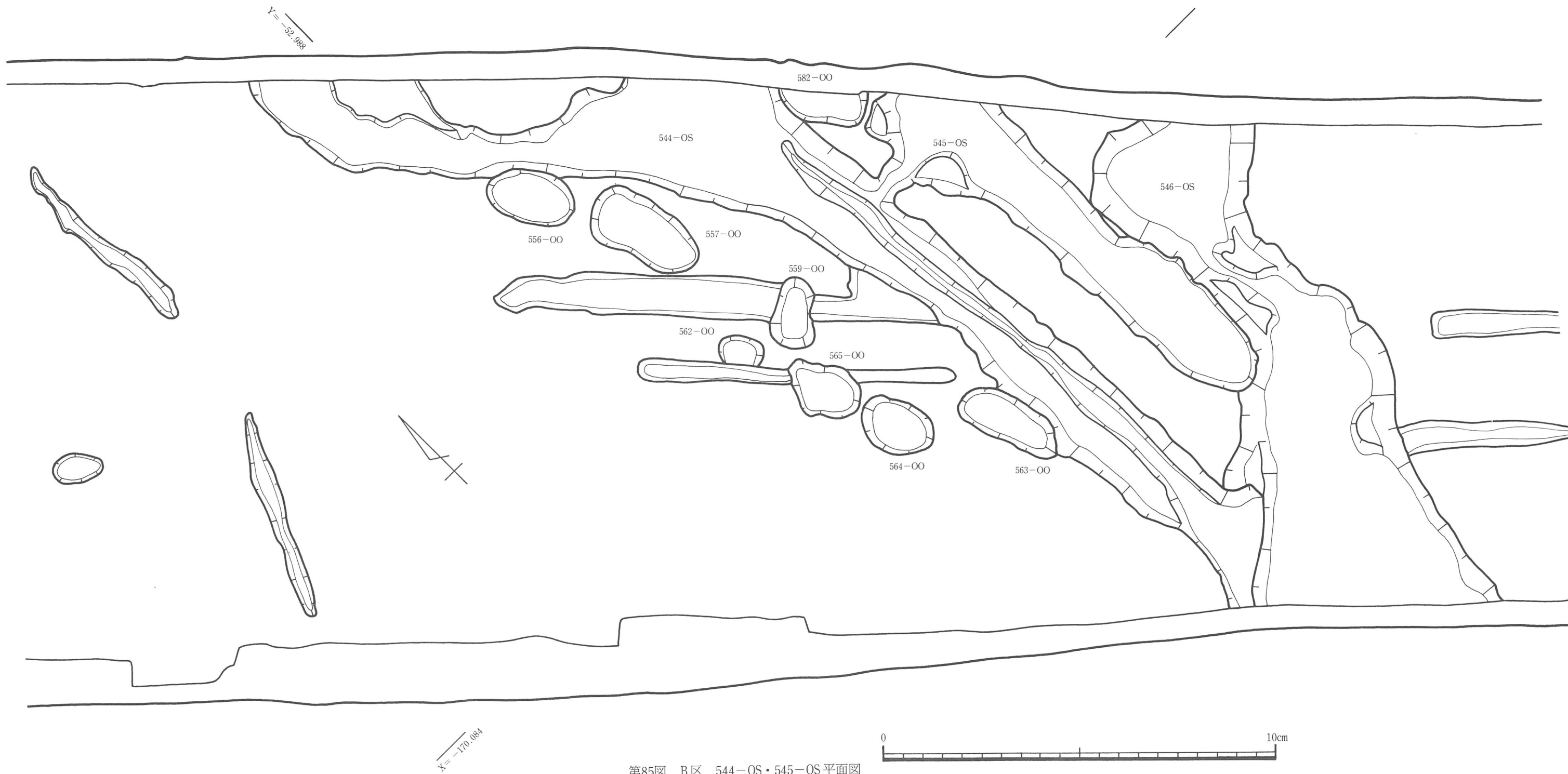
546-OS (第84・86図、図版46・47)



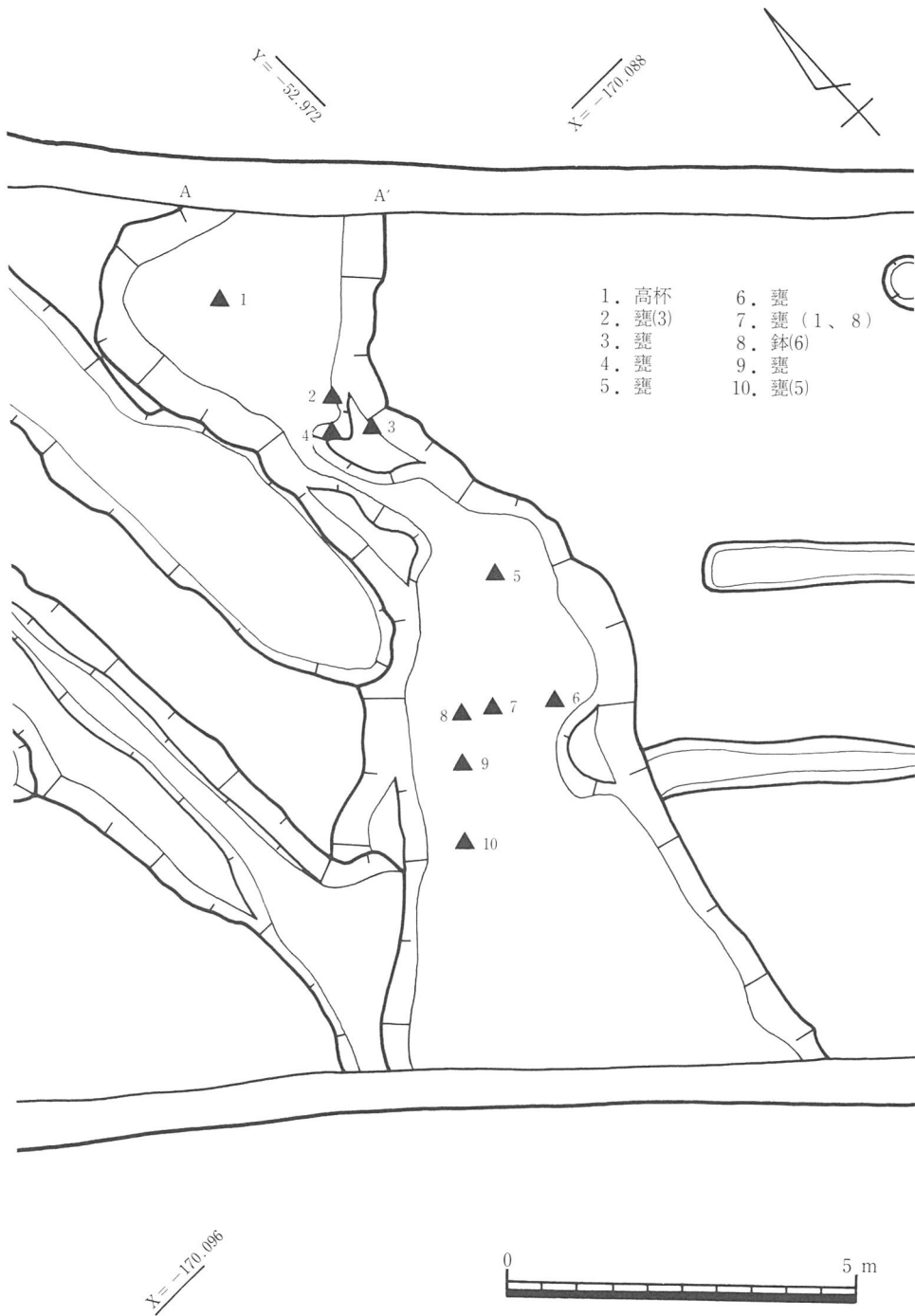
- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 1. 2.5Y3/1黒褐色シルトと粘土と炭層の互層 | 6. 10Y8/1灰白色細～小礫 |
| 2. 2.5Y7/3灰黄色細砂(炭層混り) | 7. 10Y6/1灰白色細砂 |
| 3. 2.5Y6/2灰黄色シルト | 8. 5GY7/1明オリブ褐色シルト |
| 4. 5Y7/2灰白色粗砂 | 9. 5YR5/8明赤褐色細～小礫 |
| 5. 7.5Y4/1灰色シルト | 10. 0Y6/2灰オリブ粗砂 |

調査区を横断する溝で、589-ORの埋没後に走行する。溝幅は一定せず、走行も蛇行気味である。深度は50～80cmを測り、溝底および肩部には砂礫のえぐり込みがみられる。堆積層は、大きく上下2層に分離できる。上層は黒褐色粘土・シルトおよび炭層の互層が主体で厚さ10～20cmを測る。

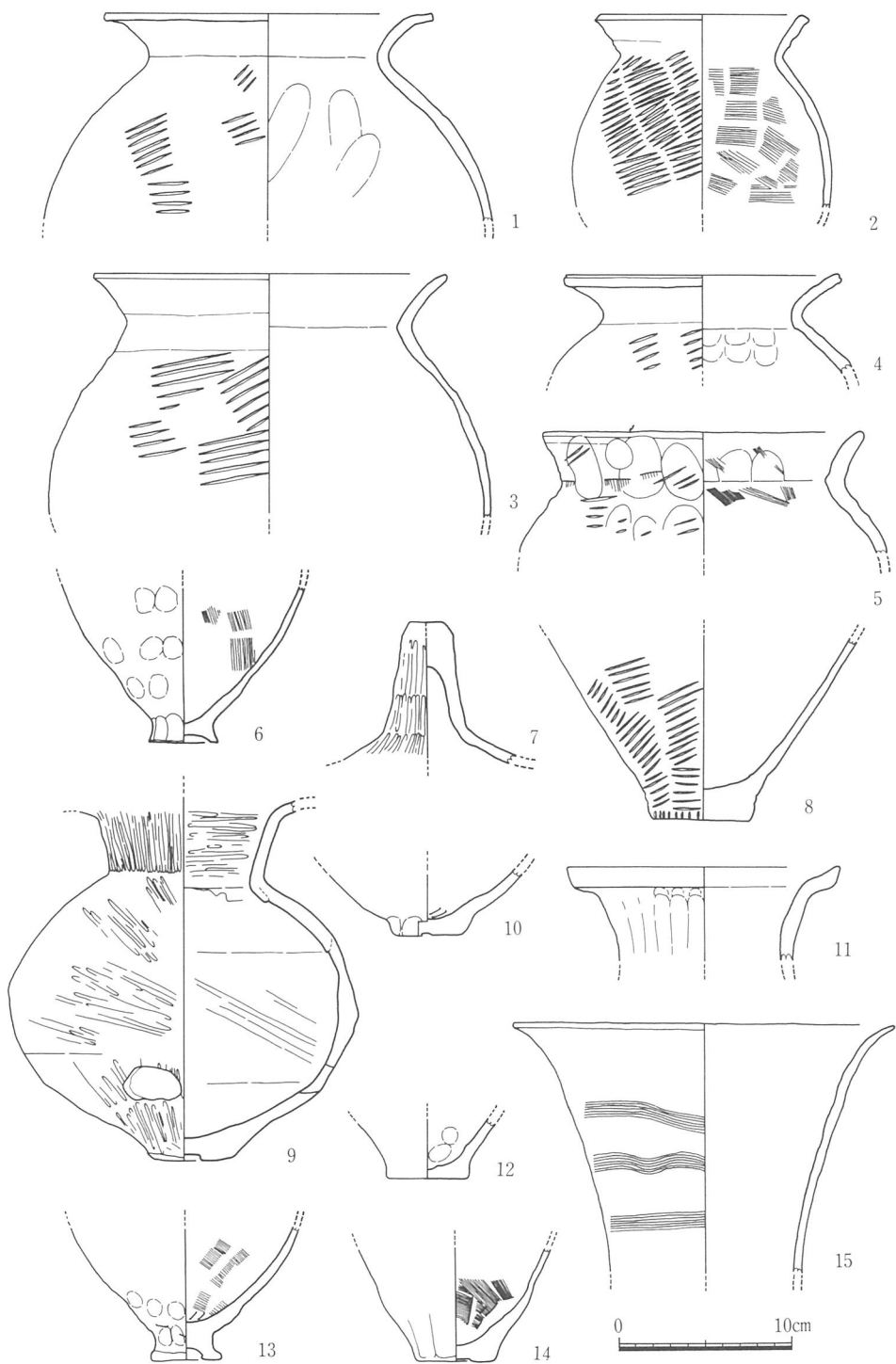
第84図 B区 546-OS・断面図(A-A')



第85图 B区 544-OS · 545-OS 平面图



第86图 B区 546-OS · 平面图



第87图 B区 546-OS · 出土土器

下層は礫層を主体とし、西肩部付近にはシルトと粗砂の互層による流入土が観察される。

遺物は全て弥生土器で、上層と下層では出土状況が異なる。第86図に示す▲印は上層上面での土器の分布状況を示す。土器は炭層中に一括廃棄された状態で検出されている。復元は十分なし得なかったが、本来的には完形品に近いものと推定される。器種をみると甕が最も多く、他に高坏と鉢がある。掲図中の甕（1、3、5、8）。台付鉢(6)がそれに当り、土器様式の一括性が高い。畿内第V様式後半でも終末に近い時期と考えられる。下層での土器は、主に礫層での検出である。一般に土器の摩耗度が高く、流水により運ばれてきたと推定される。全体に畿内第V様式後半に含まれる資料が多いが、一部に畿内第II様式(15)などもみられる。ただし、二重口縁壺(9)や高坏(7)は肩口の流入土からの検出で、上層土器群とほぼ同時期の特徴を示している。

出土土器（第87図、図版79、80）

上層 台付鉢・甕・底部がある。

甕には（1、3、4、5、8）がある。(1)は体部中位より口縁部まで残存。体部は球形。口縁部の外反度は高く、口縁端部は水平方向に短かく拡張し端面を有する。体部外面は左下りの叩き（3凹/cm）。内面はナデ調整。体部最大径25.8cm。浅黄橙色を呈する。外面煤付着。(3)も体部中位より口縁部まで残存する。胴部中位に最大径（25.2cm）を有する。なで肩の体部より口縁部は緩やかに外反する。外面は左下りの叩き（2凹/cm）。内面は摩耗により観察不可。肩部より下位に煤付着。色調はにぶい黄橙色を呈す。胎土は石粒の頻度、粒度が高く粗い。(4)は口縁部より体部肩にかけて残存する。口縁部は大きく「く」の字状に外反し、口縁部端面は凹線状にくぼむ。体部外面は左下りの叩き（2凹/cm）で、屈曲部内面には指頭圧痕が顕著に観察される。胎土はチャート、長石の頻度が高く、焼成は堅緻。色調はにぶい黄橙色を呈す。全面に煤付着。(5)は口縁部から体部肩まで残存する。口縁部は口縁叩き出し技法による成形がなされた後、刷毛目調整、指ナデ調整を受けている。体部外面の叩きはcm単位あたり1.5凹と粗く作りと合せて他の甕と異なる様相を呈している。内面は刷毛目調整。胎土は石粒の頻度が高く粗い。色調は浅黄橙色を呈す。肩部を除き全面煤付着。(8)は体部下半より残存。突出した底部に円錐形の体部を有する。外面は左下りの叩き（2.5凹/cm）に拠るもので、底部側面にも縦方向の叩痕が観察される。内面の調整は剝離により不明。底部の成形は「円板すえおき法」⁽⁴⁾。胎土は粗く、突出する底部を除き全面に煤が付着する。焼成は堅緻。台付鉢には(6)がある。口縁部欠損。脚台は「ハ」の字形に拡がり、体部外面には粘土接合痕上に規則的に施されている指頭圧痕が観察される。

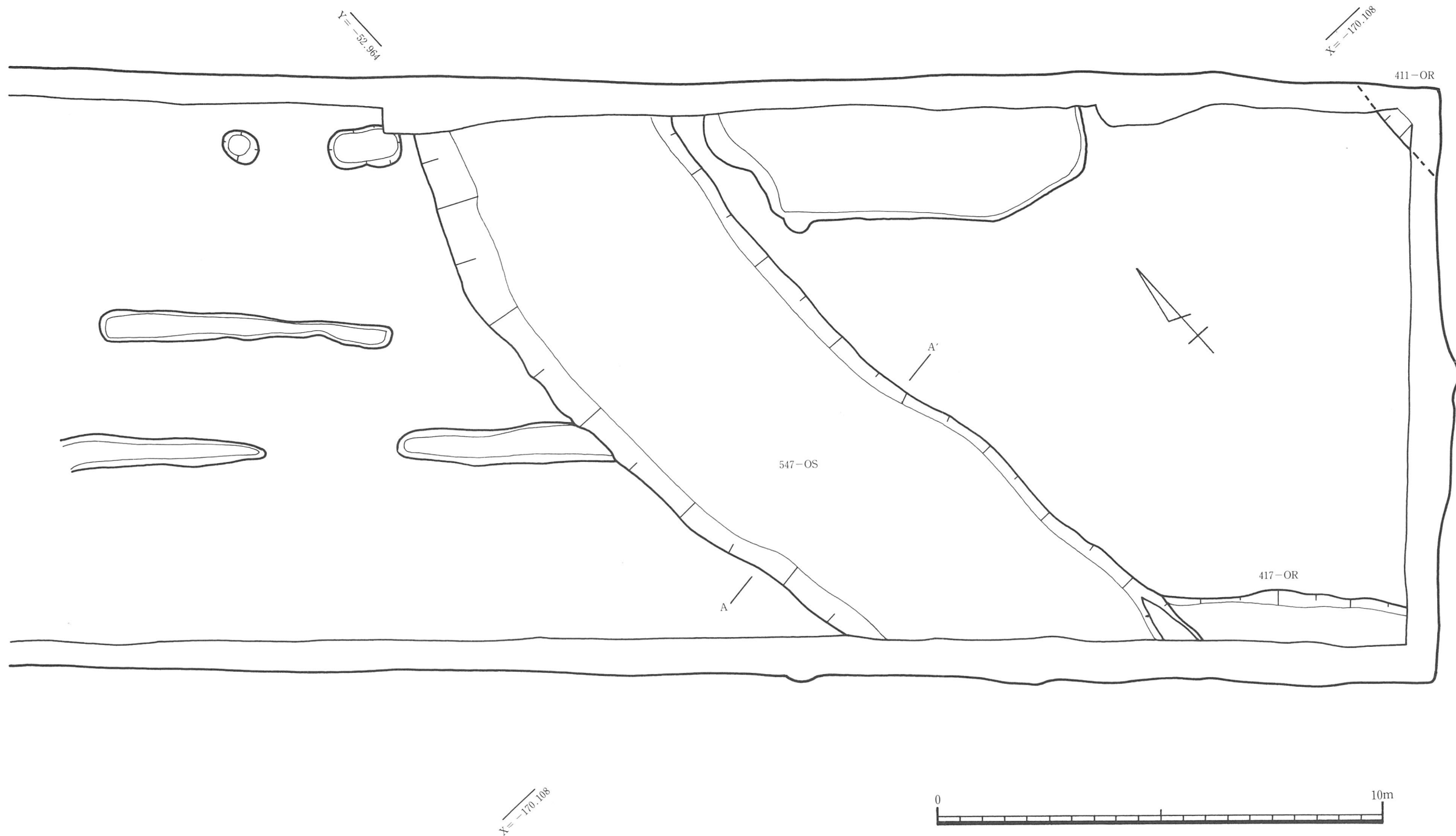
内面は刷毛目調整（12条/cm）。色調は浅黄色。胎土には赤色酸化土粒が目立つ。底部には(10)がある。「底部輪台技法」に拠るもので、内面にはへら状工具のあたりが観察される。焼成は堅緻で、色調は浅黄橙色を呈する。

下層 広口壺、二重口縁壺、短頸壺、高坏、鉢、台付鉢、底部がある。掲図中、(15)を除く他は畿内第V様式後半。

広口壺(15)は口頸部残存。大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。口頸部は3帯の櫛描直線文で飾られている。内面はナデ調整。胎土は長石、石英、赤色酸化土粒の頻度が高い。畿内第II様式。二重口縁壺(9)は、口縁部を欠損する他、完存する。頸部は開き気味に伸び、体部は球形を呈す。底部は「底部輪台技法」に拠るもので、突出度が低い。体部下半には焼成前に穿れた円孔がある。外面の調整は丁寧なへらミガキが基調で、口頸部内面にまで及ぶ。体部内面には板ナデ状の粗い刷毛目調整がみられる。胎土は精製されており、焼成は堅緻。色調は浅黄色を呈する。短頸壺(11)は口頸部残存。頸部は緩やかに伸び、口縁部は受け口状を呈する。頸部外面は縦の幅広のへらミガキ。焼成は堅緻で、灰白色を呈す。高坏には(7)がある。脚柱部より裾部にかけて残存する。脚柱部は中空に近く、脚裾部は緩やかに開く。脚部外面には縦方向の細いへらミガキが丁寧に施され、内面はナデ調整により平滑に仕上げられている。胎土は粒度が低く精製されている。色調は浅黄橙色。鉢には(14)がある。底部で、体部へと連続的に外開きに伸びる。外面は面取り風のナデ上げ。内面は「くもの巣」状の刷毛目調整。胎土には雲母片が顕著で、焼成は堅緻。色調はにぶい黄色。台付鉢には(13)がある。口縁部欠損。「ハ」の字状に開く脚台に塊状の体部がつく。外面には指頭圧痕が顕著に残り、内面には刷毛目（9条/cm）が残る。胎土には同形式の(10)同様、赤色酸化土粒が目立つ。色調はにぶい黄橙色。甕には(2)がある。体部中位より口縁部まで残存。長胴気味の体部で、最大径は下位にあたる。口縁端部は下方に少し拡張する。外面は左下りの叩き（2凹/cm）。内面は横・斜方向の刷毛目調整（7条/cm）。全面に煤付着。焼成は堅緻で、胎土ではチャートの頻度が高い。底部には(12)がある。やや突出する底部で、内面に指頭圧痕が観察される。色調は黄橙色を呈し、焼成は堅緻。

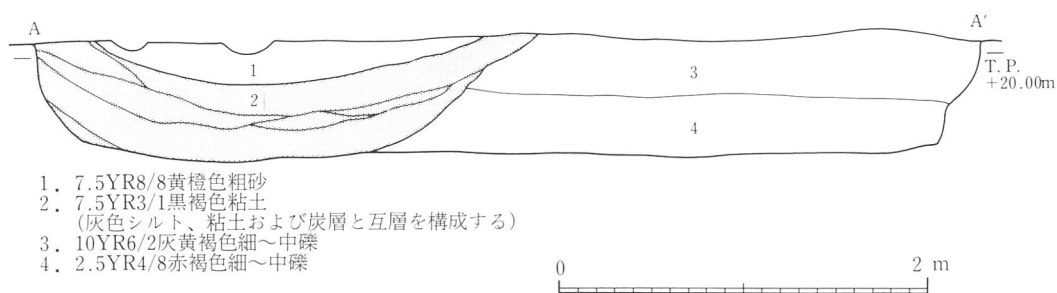
547-OS （第88、89図、図版48）

589-ORの埋没後に走行する自然流路で、417-OSに先行する。走流方向は北である。幅平均5.5m、深度平均60cmを測り、堆積層は最上層、上層、下層に分離できる。最上層は西肩部に沿って約2mの幅でみられる黄橙色粗砂である。厚土約25cmを測り、遺物は全くみられない。上層は黒褐色粘土を主体に炭層とシルトの互層を含む堆積層で、流路の西半



第88图 B区 547-OS・平面图

分を占める。遺物は、畿内第V様式後半を主とする土器群が検出されている。下層は流路の東半分を占める堆積層で、褐色系の細～中礫である。遺物として、589-ORからの混入と推定される縄文時代後期から晩期の土器が検出されている。



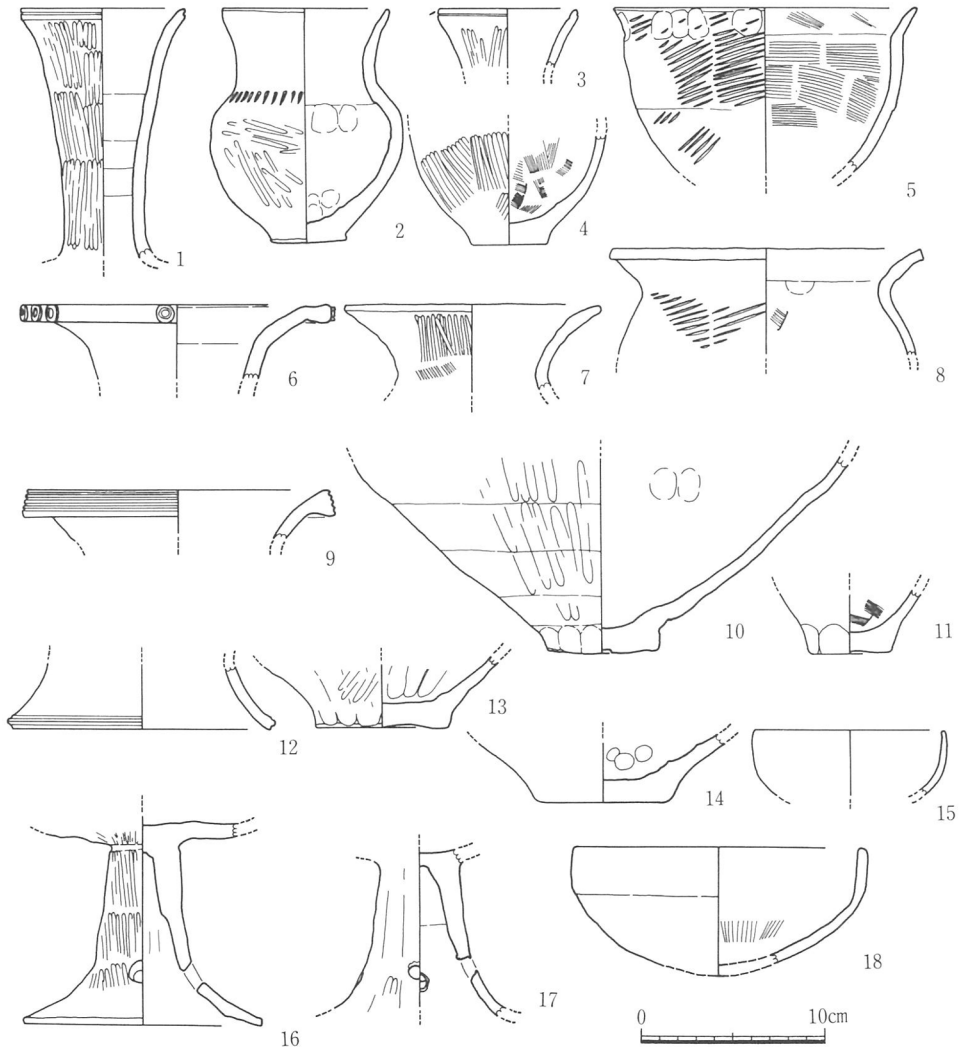
1. 7.5YR8/8黄橙色粗砂
2. 7.5YR3/1黒褐色粘土
(灰色シルト、粘土および炭層と互層を構成する)
3. 10YR6/2灰黄褐色細～中礫
4. 2.5YR4/8赤褐色細～中礫

第89図 B区 547-OS 断面図 (A-A')

出土土器 (第90、91図、図版80～82)

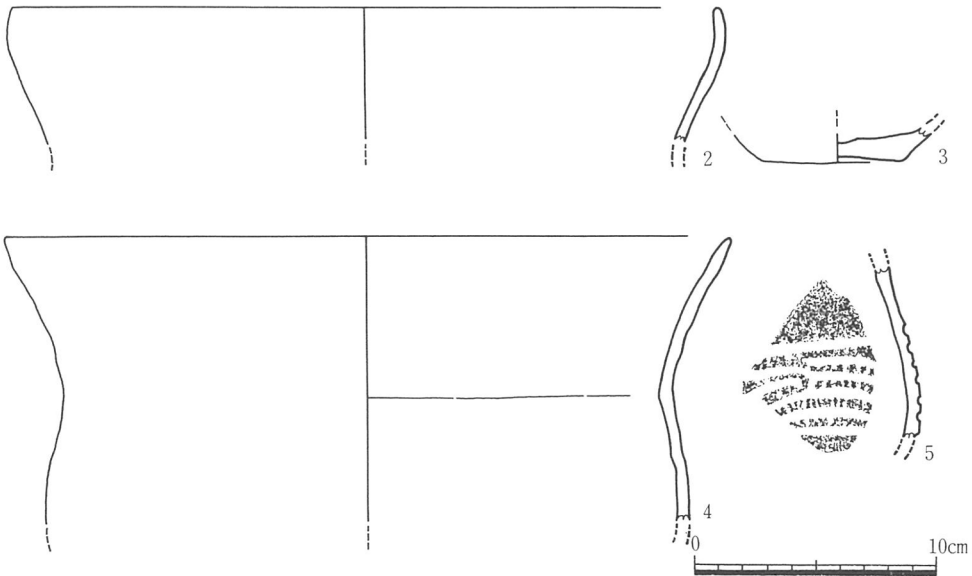
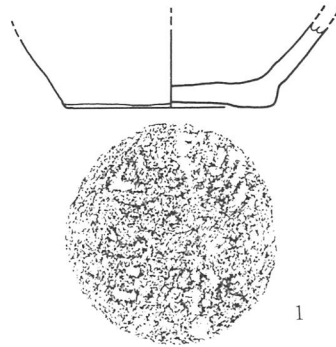
上層 時期別にみると畿内第V様式後半が多い。しかし、少量ではあるが時期が先行する資料(9、13、14)などが混じる。器種別には、広口壺、長頸壺、細頸壺、高坏、鉢、甕などがある。掲図では、時期が先行する資料を除けば他は全て畿内第V様式後半になる。広口壺には(6、7、9)がある。(9)は畿内第V様式前半の広口壺で、口頸部が残存する。口頸部は大きく外反し、端部は下方に厚く肥厚し端面には4条の凹線が走る。摩耗が著しく調整は不明。胎土は石粒の頻度・粒度が低く、焼成は堅緻。色調は淡黄色。(7)は口頸部残存。口頸部は大きく外反し、端部は端面をなして終わる。外面は刷毛目調整の後に縦方向のヘラミガキが丁寧に施されている。胎土は精製されており、焼成は堅緻。長頸壺には(2、3、4)がある。(2)は完形品。器高12.5cmを測る小形品。体部最大径は肩付近に位置し、口縁部は端部付近で少し外反する。体部肩は刺突文で飾られ、下位には雑なヘラミガキが施されている。底部の突出度は低く、縁辺が少く拡張する。「円板すえおき法」に拠る。焼成は堅緻で、色調は淡黄色。胎土は赤色酸化土粒の頻度が高い。(4)は底部残存。突出度の低い底部に、塊状の体部が伸びる。外面には丁寧なヘラミガキが施されている。内面は刷毛目調整(12条/cm)。焼成は堅緻。色調は灰オリーブ色。細頸壺には(1)がある。口頸部残存。口縁端部側面には一条の凹線が走る。外面の調整は縦方向のヘラミガキで、3段階に分けて施されている。内面のナデ調整は不十分で、4条の粘土紐接合痕が観察される。胎土は石粒の頻度が高い。色調は淡黄色。高坏には(15、16、17)がある。(15)は坏部残存。塊状を呈する坏体部だが、剝離が著しく調整等は不明。(16)は脚部残存。中空で脚柱

部と裾部の境は不明瞭である。3方からの円孔が穿れている。外面は縦方向の細いヘラミ
 ガキが丁寧に施されている。色調は浅黄橙色(17)は脚柱部残存。脚柱部と裾部の境が不明瞭
 で、4方向からの円孔がある。色調はにぶい黄橙色。鉢には(5と18)がある。(5)は体部
 残存。碗状の体部に口縁部が短かく外反する。口縁部は叩き成形の後、指押えにより成形
 されている。叩きは左下りで、3凹/cmを測る。内面は刷毛目調整(7条/cm)。焼成は堅緻
 で、胎土には赤色酸化土粒が顕著である。色調は橙色。(18)は底部が欠損する。碗状の体部
 より口縁部は短かく直立する。外面はナデ調整。内面は放射状の刷毛目調整(4条/cm)。



第90図 B区 547-OS・出土土器(1)

胎土は精製され、焼成は堅緻。一部にスス附着。色調はにぶい黄橙色。甕には(8)がある。体部上半が残存する。口縁部は緩やかに外反し、端部は下方に少し拡張する。体部外面は左下りの叩き（2凹/cm）。焼成は堅緻。色調は灰黄色。底部には（10、11、12、13、14）がある。(10)は壺底部と推定される。突出度の高い底部より直線的に体部へと続く。体部外面には縦位のヘラミガキが施されている。色調はにぶい黄橙色。(11)は突出度の高い底部で、内面に「くもの巣」状の刷毛目調整がみられる。(13)は少しあげ底を呈し、第三-V様式。内面は指ナデ調整。外面はヘラミガキ。色調は浅黄橙色を呈する。(14)は摩耗により調整等は不明だが、形よりして中期と推定される。内面に指頭圧痕が顕著にみられる。胎土は石粒の粒度が高く粗い。(12)は器種不明。



第91図 B区 547-OS 出土土器(2) (S=1/3)

下層 縄文時代後期の粗製深鉢、有紋深鉢、底部、晩期の深鉢などがある。(2)は粗製深鉢で、復元口径29cmを測る。口縁部は内湾し、外面は原体不明の条痕調整。色調は黒灰色。後期後葉。(5)は有紋深鉢と胴部破片。内外面ともナデ調整で、帯状沈線文上に縄文 LR を施す。色調は褐灰色。(1)は深鉢の底部と推定される。くぼみ底で、網代の圧痕が残存する。底径8.5cmを測る。網代の網方は「2本超え、2本潜り、1本送り」のII類に該当する。焼成は堅緻で、色調はにぶい黄橙色。後期中葉。(3)は内外ナデ調整の底部。少しくぼみ、底径約6cmを測る。色調はにぶい黄橙色。後期後葉か。(4)は復元口径30cmを測る深鉢。口頸部は緩やかに外反し、背部は尖り気味に終わる。内外面ともナデ調整。内面には約2cm間隔で粘土紐接合痕が観察される。色調は灰黄褐色。晩期中葉。滋賀里III b 式か。

<中世以降>

調査区の西半部で検出されている遺構群である。主な遺構に掘立柱建物、ピット群、柵列、土壇等がある。特に柵列を含めて建物関係遺構群は一定間を形成している。なお、これらの遺構からの遺物は僅少で、時期決定に際しては困難な点があることは否めない。

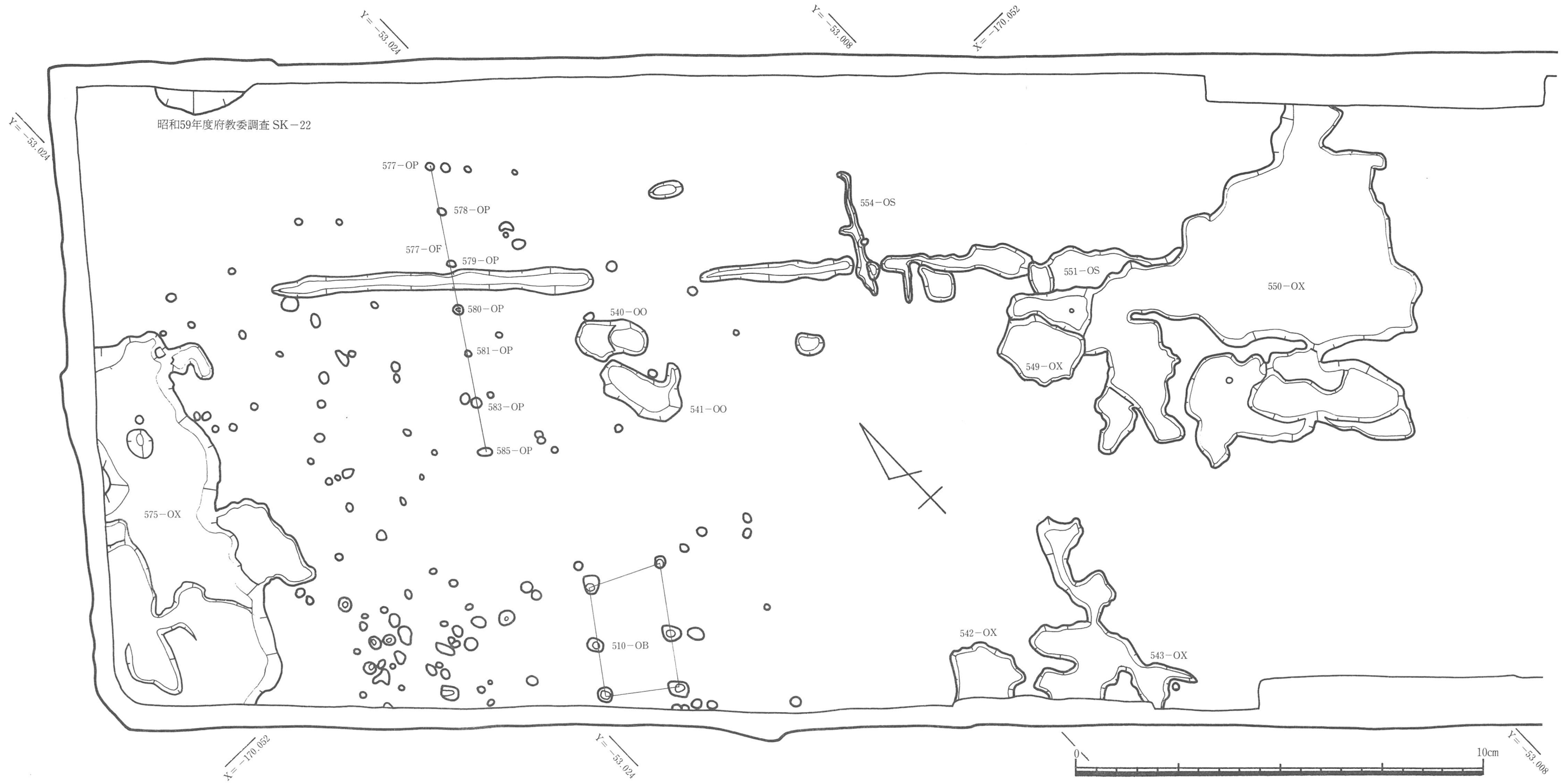
イ) 掘立柱建物

510-OB (第92・93図、図版49・50)

当地区西部において検出されたもので、1間×2間のみを確認した。建物は、その長辺が、北東-南西方向を向くもので、柱間は、長辺が約140cm、短辺が約180cmを測る。建物を構成するピットは、不整形、あるいは不整円形を呈するもので、径約30cm～40cmを測る。深さは、約30cm～40cmと深い。また、これらのピットは、すべて柱痕部が確認される。ピットの掘り方の埋土は、褐色に暗灰色が混じる粘質土を呈するのに対し、柱痕部は、明褐色粘土を呈している。柱痕部の規模は、径約15cm～20cmを測る。これらのピットからの遺物は、弥生土器片が若干出土しているのみである。

ロ) ピット群 (第92図、図版49)

当地区西部では、多数のピットが、検出された。それらは、特に510-OBの西方に集中するが、柱列をなすものは認められない。これらピットからの出土遺物は、若干の弥生土器小片が認められるにすぎず、時期の決定をかく。しかしながら、前年度の府教委の調査成果によるとこの周辺では、弥生時代の遺構が検出されており、これらピット群と同一時期である可能性も考えられる。

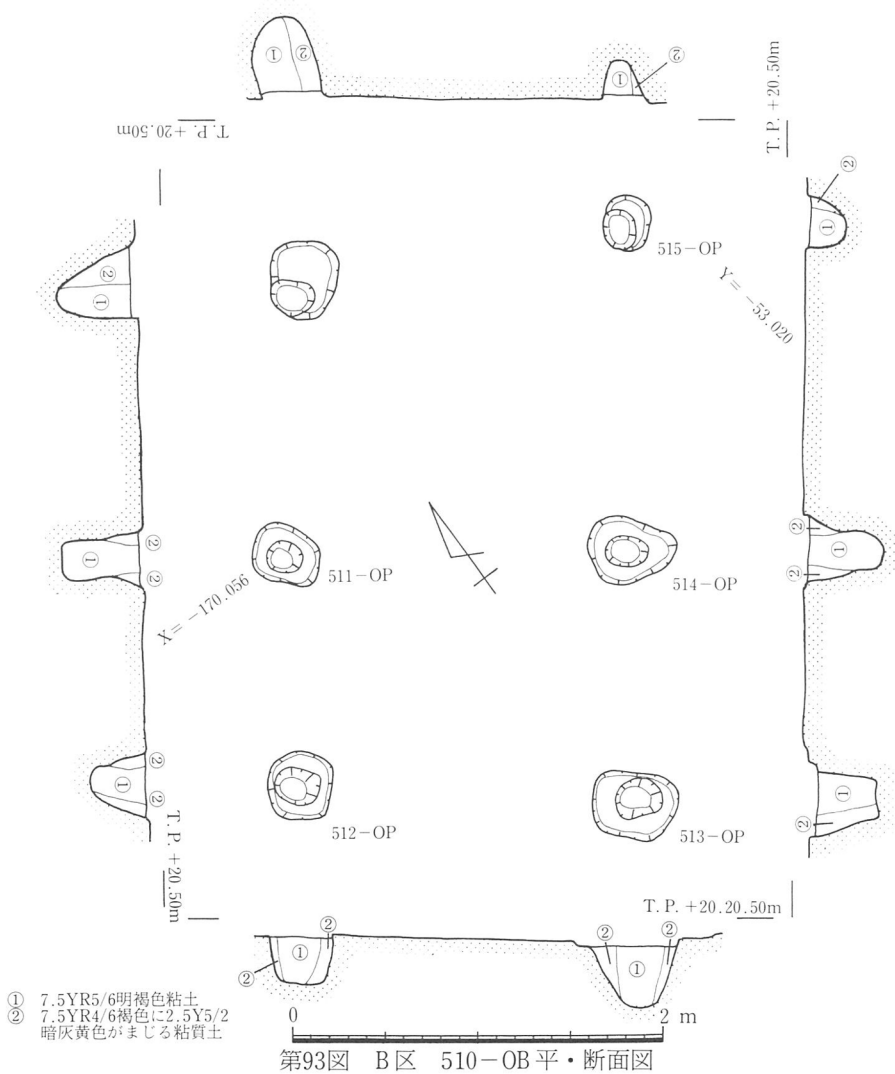


第92図 B区 西半部遺構平面図

ハ) 柵 列

577-OF (第92図、図版50)

当地区西部において検出されたもので、577、578、579、580、581、583、585-OPの7基により構成される。これらのピットは、いずれも径20cm前後の円形で、深さは、概ね5cm~15cmを測る。埋土は、明褐色粘質シルト、にぶい黄褐色粘質シルト、褐色と暗灰黄色が混じる粘質土を呈する。柵列の方向は、北東-南西方向で、前述した掘立柱建物(510-OB)の方向とほぼ一致し、この建物に伴うものである可能性が考えられる。遺物は、ピットからの出土が見られず、この柵列の時期決定を欠く。



遺構番号	法 量 (cm)		埋 土	備 考
	大きさ	深		
415-OP	26×22	19	明褐色粘質シルト	弥生土器出土 弥生土器出土
417-OP	14×15	8	明褐色粘質シルト	
419-OP	24×18	10	明褐色粘質シルト	
421-OP	17×19	4	にぶい黄橙色粘質シルト	
422-OP	16×14	9	黄褐色粘土	
423-OP	20×13	8	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
426-OP	14×17	11	灰黄褐色粘質土	
427-OP	33×24	25	暗褐色粘質土	
430-OP	15×14	11	灰黄褐色粘質シルト	
431-OP	19×16	10	灰黄褐色粘質シルト	
432-OP	42×20	14	明褐色粘質土 (炭化物含む)	
433-OP	24×19	8	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
434-OP	20×14	10	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
435-OP	25×21	8	明褐色粘質土	
436-OP	18×18	10	明褐色粘質シルト	
437-OP	14×22	11	明褐色粘質シルト	
440-OP	18×14	10	明褐色粘質シルト	
441-OP	14×14	10	灰黄褐色粘質シルト	
442-OP	11×32	7	明褐色粘質シルト	
443-OP	16×19	10	暗褐色粘質土	
444-OP	20×14	13	明褐色粘質シルト	
445-OP	16×20	9	明褐色粘質土 (炭化物含む)	
446-OP	19×15	12	暗褐色粘質土	
448-OP	14×14	7	暗褐色粘質土	
455-OP	17×14	7	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
456-OP	14×13	13	明褐色粘質土	
457-OP	20×32	14	灰黄褐色粘質シルト	
459-OP	22×32	15	明褐色粘質シルト	
460-OP	22×23	10	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
461-OP	18×12	9	灰黄色粘質シルト	
462-OP	16×20	9	明褐色粘質土	
464-OP	16×20	13	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
465-OP	13×15	9	明褐色粘質シルト	
466-OP	16×20	9	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
468-OP	20×28	7	明褐色粘質土	
470-OP	35×32	11	(掘り方) 暗褐色粘質土 (炭化物含む) (柱根跡) 褐灰色黄色粘質土	
471-OP	17×17	13	明褐色粘質土 (炭化物含む)	
472-OP	18×18	8	明褐色粘質土	
473-OP	24×14	13	暗褐色粘質土 (炭化物含む)	
477-OP	34×26	21	暗褐色粘質土 (炭化物含む)	
478-OP	41×31	22	暗褐色粘質土 (炭化物含む)	
479-OP	26×23	9	(掘り方) 暗褐色粘質土 (炭化物含む) (柱根跡) 暗灰黄褐色褐色粘質シルト	
480-OP	35×29	8	(掘り方) 暗褐色粘質土 (炭化物含む) (柱根跡) 褐黄色粘質土	
482-OP	30×30	8	(掘り方) 灰黄褐色粘質シルト (柱根跡) 暗褐色粘質土	
485-OP	17×15	7	暗褐色粘質土 (炭化物含む)	

表3 B区 ピット一覧(1)

遺構番号	法 量 (cm)		埋 土	備 考
	大きさ	深		
486-OP	44×37	15	暗褐色粘質土 (炭化物含む)	
489-OP	35×24	9	暗褐色粘質土 (炭化物含む)	
490-OP	32×24	15	暗褐色粘質土 (炭化物含む)	
491-OP	14×14	8	暗褐色粘質土 (炭化物多い)	
492-OP	26×18	14	暗褐色粘質土 (炭化物多い)	
493-OP	33×39	13	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
497-OP	30×23	19	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
498-OP	14×19	10	暗褐色粘質土 (炭化物含む)	
499-OP	22×16	5	明褐色粘質土	弥生土器出土
500-OP	22×49	17	暗褐色粘質土 (炭化物と焼土含む)	
502-OP	14×12	8	暗褐色粘質土 (炭化物含む)	
503-OP	33×34	15	明褐色粘質土	
504-OP	28×29	16	明褐色粘質土	
505-OP	24×33	15	明褐色粘質土 (炭化物含む)	
506-OP	30×35	8	明褐色粘質土	
507-OP	26×29	7	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
508-OP	24×22	7	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
509-OP	21×19	8	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
510-OP	42×42	45	(掘り方) 明褐色粘土 (柱根跡) 褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	510-OB 弥生土器出土
511-OP	29×37	44	(掘り方) 明褐色粘土 (柱根跡) 褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	510-OB 弥生土器出土
512-OP	36×24	32	(掘り方) 明褐色粘土 (柱根跡) 褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	510-OB 弥生土器出土
513-OP	34×46	36	(掘り方) 明褐色粘土 (柱根跡) 褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	510-OB
514-OP	36×46	44	(掘り方) 明褐色粘土 (柱根跡) 褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	510-OB
515-OP	30×24	25	(掘り方) 明褐色粘土 (柱根跡) 褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	510-OB
518-OP	11×20	7	明褐色粘質シルト	
520-OP	20×24	10	明褐色粘質シルト	
521-OP	18×23	15	明褐色粘質シルト	
524-OP	26×30	9	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
525-OP	24×19	9	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
526-OP	20×20	11	灰黄褐色粘質シルト	
528-OP	24×17	8	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
529-OP	20×17	7	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
530-OP	25×22	9	明褐色粘質土	
531-OP	22×15	9	明褐色粘質土	
577-OP	22×18	5	褐黄色と灰色が混じる粘質シルト	577-OF
578-OP	21×16	7	にぶい黄褐色粘質シルト	577-OF
579-OP	18×24	17	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	577-OF
580-OP	22×24	12	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	577-OF
581-OP	18×16	5	褐灰色粘質土	577-OF
583-OP	23×24	9	明褐色粘質シルト	577-OF
584-OP	27×20	8	褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	
585-OP	21×37	16	(掘り方) 灰黄褐色粘質シルト (柱根跡) 褐色に暗灰黄色が混じる粘質土	577-OF

表4 B区 ピット一覧(2)

二) 土 壙

調査区の全域で検出されているが、544-OSの西側では、特に一定の群を形成している様相が看取される。平面形で類型すると、①楕円形を呈する……540-OO、541-OO、556-OO、557-OO、559-OO、563-OO、564-OO、565-OO、587-OO ②円形を呈する……562-OO、586-OOの2種類に分類できる。埋土は、概ね明褐色系の粘土あるいは粘土塊が混じり、粗砂および細礫を含むのが特徴である。遺物の出土量は少ないが、弥生土器片から瓦器片までみられる。以下、主要な遺構を記述する。

540-OO (第92図、図版51)

当地区西部で検出された土壙である (I 類型)。規模は、約180×90cmを測り、深さは、約20cmである。埋土は2層に分かれ、上層は、鈍い黄褐色細礫混じり粗砂、下層は黄褐色粘土を呈する。遺物は、下層より、弥生土器、須恵器、瓦器の小片が若干出土している。

541-OO (第92図、図版51)

前述した540-OOのすぐ南方で検出された土壙である (I 類型)。規模は、約210×90cmを測り、深さは、30cmである。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトと明褐色粘土等が混じるもので、遺物の出土はない。

557-OO (第85図)

長軸約300cm、短軸約150cmを測る (I 類型)。深度は10～15cmで、断面は扁平なU字型を呈する。埋土は明褐色混砂粘土の単一層。遺物は未検出。

563-OO (第85図)

544-OSに後出する。長軸約270cm、短軸約110cmを測る (I 類型)。深度は約10cmを測る。断面形、埋土をと557-OOに共通する。

586-OO

547-OSの西側で検出された。径70cmを測る円形の土壙である (II 類型)。深度は15～20cmを測る。埋土は明褐色混砂粘土で、544-OS西側のI 類型の土壙群に共通する。遺物は未検出。

ホ) 性格不明遺構

542-OX (第92図、図版49)

当地区西部で検出されたもので、不整形な落込み状を呈する。規模は、約180cm×130cmを測り、深さは、約20cmである。埋土は、黄褐色粘土とにぶい黄褐色粘質シルトが混じるもので遺物の出土はない。

543—OX (第92図、図版49)

前述の542—OOのすぐ東方で検出されたものである。埋土は、黄褐色粘土とにぶい黄褐色粘質シルトが混じるもので、弥生土器、須恵器の小片が出土している。

549—OX (第92図、図版49)

当地区西部で検出されたものである。規模は、約210cm×160cmを測り、深さは、約10cmで浅い。埋土は、黄褐色粘土を呈する。遺物の出土はない。

550—OX (第92図、図版49)

当地区西部で検出されたもので、不整形な落込み状を呈する。埋土は、黄褐色シルト、灰黄褐色シルト混じり粘土、暗灰黄色細礫混じり粗砂、暗灰黄色粘土等からなり、弥生土器、瓦質土器、染付の小片が若干出土している。

補) 粘土採掘坑 (第92図、図版49)

B区西端で検出されたもので、A-4区で検出された611—OOの東端部である。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、白磁、瓦、煉瓦、鉄釘、サヌカイト剥片等が出土する。

c) 小 結

弥生時代を除く遺構については、情報量の不足より性格等に不明な点が多く、先の土壌I類型につき土壌墓の可能性が指摘できる程度である。以下、弥生時代の遺構に関する2・3の問題に触れて小結とする。

弥生時代の遺構には自然河川と溝がある。その内、589—ORの走流の始まりと埋没の時期および出土遺物の内容は、当時の環境を復元する上に不可欠である。589—ORの埋没の時期は、出土遺物の下限と上層遺構(546—OS、547—OS)との関係より弥生時代後期前半と推定される。埋没過程は、堆積層の状況より急激な流れ(3層)の後、湿地状と乾燥の繰り返し(1～2層)により漸移的に機能が停止していった、と復元できる。走流の始まりは自然河川という性格上、出土遺物では時期決定できず、走行する基盤層の時期にその上限を求める以外方法はない。従って、本河川の場合、基盤層である黄色粘土に縄文時代後期の土器が包含されていることから、この時期をもって走流の上限とできよう。出土遺物には、縄文時代後期、晩期と弥生時代全般にわたる土器がみられる。後述のようにC区で縄文時代後期の遺構および包含層と晩期の包含層が検出されていることから、特に摩耗度の低い資料に関してはそれらよりの流入の土器が含まれている可能性がある。又、589—OR内出土縄文土器とC区縄文土器の下限がともに晩期前葉から中葉であり、その後の突

帯文土器が欠落する点は注目される。

546-OS・547-OS 出土土器には概ね畿内第V様式後半に属す資料が多く、盛行時の長頸壺を欠くことや突出度の低い底部が多くみられる等の諸点より、A₁区240-OX とほぼ同時期の型式学的特徴を示している。流路内の出土土器の器種には、A₁区240-OX にみられない二重口縁壺や台付鉢がある。流路内出土土器という制約はあるものの型式学的には当時期の240-OX に欠落する器種を予測する意味では参考になり得る。

付) 240-OX の編年的位置

240-OX 出土土器を検討する際、この遺構の続きである試掘時のSX-4⁽⁶⁾の資料も含める必要がある。両者とも土器の一括性は高く、それらの器種は広口壺、長頸壺、短頸壺、台付細頸壺、小形鉢、高坏、甕などで、一定の形式構成がみられる。この一群の土器の特徴を畿内第V様式中頃である池上遺跡J地区3号・5号井戸出土土器⁽⁷⁾とを比較すると、①高坏口縁部の外反度を強い(試図22-52)②短頸壺(第15図-11)や小形甕(試図23-63)などの新たな器種が出現している③椀状の体部を有する高坏の脚部が長くなり、脚柱部と裾部の境が明瞭である(試図22-58)などの諸点において新しい要素がみられ、先の池上遺跡の一群に後出する土器群であることは明らかである。次に、池上遺跡J地区6号井戸⁽⁸⁾に先行し庄内式甕を伴出しない一群で畿内第V様式終末に位置する府中遺跡SD09-下層土器⁽⁹⁾とを比較すると、府中遺跡SD09でみられる①坏部が深く坏口縁部が大きく外反する高坏(府中：図版10-98)②加飾する複合口縁壺(府中：図版10-92)等の特徴を示す形式が240-OX にみられない点に特徴を見出し得る。従って240-OX の土器群は弥生時代後期中頃から終末との間に編年的に位置づけられることになる。ただし、府中遺跡SD09下層の一群が、庄内式甕を伴出する時期の池上遺跡J地区6号井戸一群に共通する形式の高坏(府中：図版10-97と池上tig52-12)を含む点から、240-OX の一群はどちらかと云えば、先の池上遺跡J地区3号、5号井戸に近い型式を示すと考えられる。(小山田・岡本)

III C地区の調査

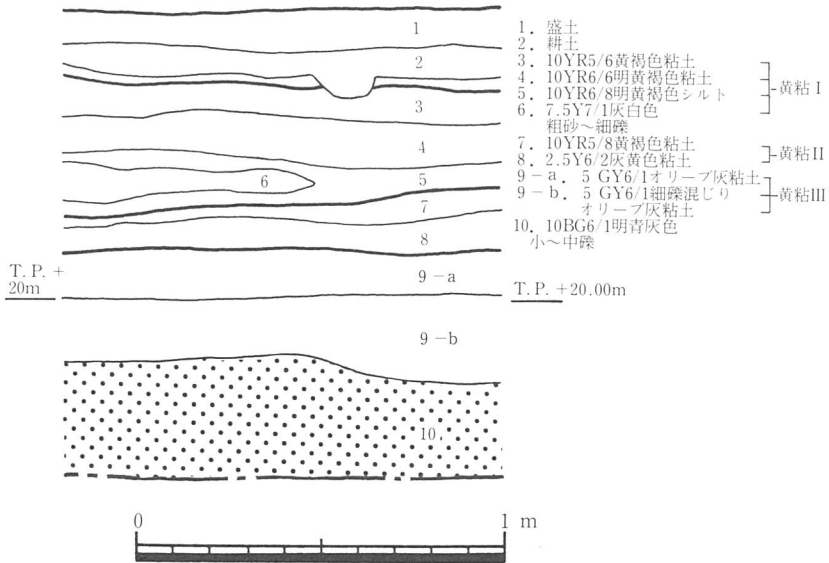
6) C区の遺構と遺物 (図版5・8)

a) 基本層序 (第94図、図版52)

調査対象地の東端に位置する調査区で、全長約100mを測る。基本的な堆積過程はB区と同様に砂礫層+黄色粘土層であるが、以下の点において異なる。①A・B区で概括された黄色粘土が土質と出土土器により細分可能である②調査区の東側(411-OR以東)では黄色粘土層の一部に相当する黒褐色粘土層が確認された。最下層には調査区全域にわたり明青灰色小～中礫層(10層)が広がる。流木を含む。上面高 T. P. 19.85mを測るが、部分的に耕土直下まで隆起している。次に411-ORの西側では黄色粘土が堆積する。黄色粘土層は西壁断面の3層～9層に対応するが、先述の通り出土土器と土質を基準に次の3時期に分離できる。

(黄色粘土I) 9層。灰オリーブを基調とする粘質土で、9-b層は10層への漸移的に変わる。縄文時代後期の土器(3、7)を含む。

(黄色粘土II) 7～8層。黄色を基調とする粘土で、8層上面では部分的にシルトに変わる。8層上面では住居址状の土壌と縄文時代後期の土器(4、6、8)が検出されている。



第94図 C区 西壁断面図

層でも縄文時代後期の土器が出土しており、8層に対応する包含層の可能性がある。

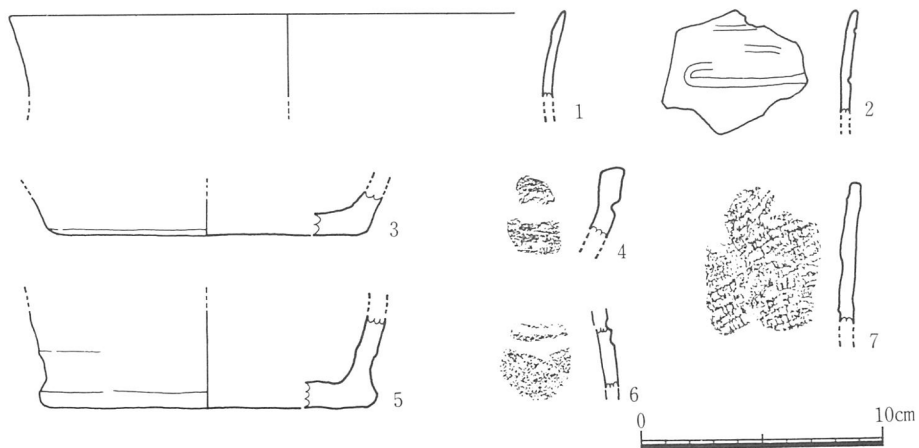
(黄色粘土III) 3～6層。粘土とシルトで構成され部分的に粗砂と細礫の間層がみられる。縄文時代晩期の土器や石棒状石製品が検出されている。

調査区の東側では同じく砂礫上に黒褐色粘土が堆積している。途中を後の411-ORにより分断されているので、西側の黄色粘土層との直接的な検討は不可能である。しかし、黒褐色粘土層上面に先の7層が堆積していることから、黒褐色粘土層は西側の8層・9層と対応することが推定される。

遺構の検出面は8層および黒褐色粘土層上面と3層上面にあたる。その内、8層上面は縄文時代後期の生活面である可能性は高い。3層上面は遺構の大半を検出する面であるが、直接上位が現代の耕作土・床土になることから、単に遺構検出面になるにすぎないと考えられる。主要な遺構に土壌・溝および自然河川がある。

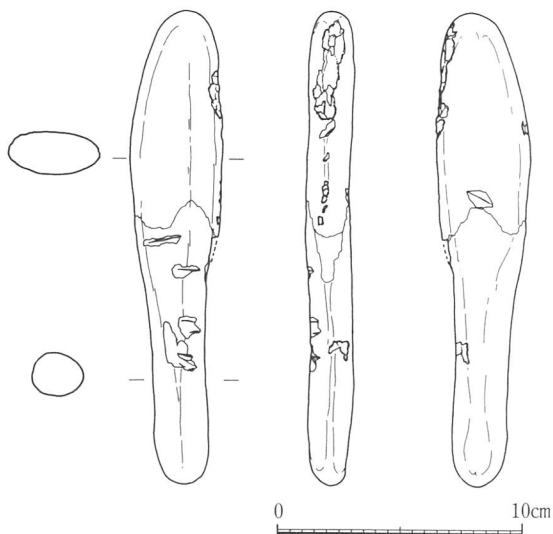
黄粘 I～III出土遺物 (第95図、図版82)

土器と石製品がある。土器は縄文時代後期から晩期。(4、5、6)は後述する400-OOに関連する資料である。(1)黄色粘土I・5層出土。深鉢口縁部。復元口径25cmを測る。端部は尖り気味に終わる。調整不明。生駒西麓産。晩期前葉・中葉。(2)黄色粘土II・7層出土。深鉢の口縁部。口縁部は山形を呈し、窓枠状の沈線文が付く。色調は黒褐色後期葉か。(3、7)黄色粘土III・9-b層出土。(3)は復元口径13cmを測る。底部(7)は縄文地の深鉢の口縁部。口縁部は外傾し直線的に伸び、端部は平坦面になる。縄文の撚りはLR。後期前葉～中葉。(4、5、6)黄色粘土II・8層上面出土。後述する400-OO周辺の遺構面直上より出土。(4)



第95図 C区 黄色粘土I～III層出土土器 (S=1/3)

は有紋深鉢の口縁部。端部直下に断面三角形を呈する沈線文が走る。内外ナデ調整。後期後葉。(5)は深鉢の底部。復元口径13.5cmを測る。底部の外縁は外方向に厚く拡張する。内外ともナデ調整。色調は淡黄色。後期後葉。(6)深鉢胴部。弧を描く沈線文が付く。隆帯状か。内外ともナデ調整。北白川上層式2期か。



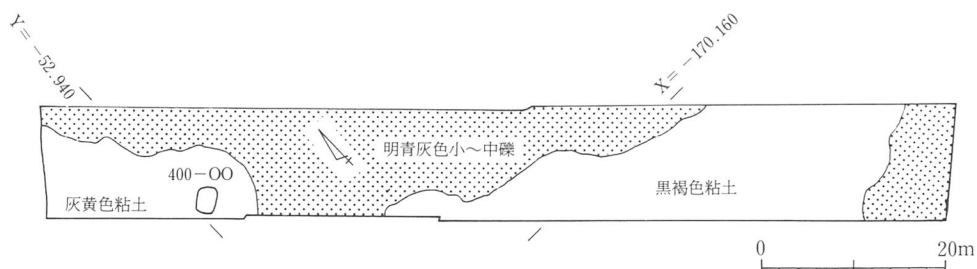
第96図 C区 黄色粘土 I 層出土石器 (S=1/3) <縄文時代>

石棒状石製品(第96図、図版83)

黄色粘土 I 出土。長さ19.25 cm、幅3.79 cm、厚さ1.77 cm、211.1gを測る。やや細長く扁平な頭部に断面が丸い握部を付した根棒状の石製品である。頭部のカーブがゆるやかな一片の上半に、長さ4.8cm、幅0.5cmの摺打痕が見られることから、叩き石的用途が考えられる。やや軟い緑泥片岩製である。

b) 遺構各説

灰黄色粘土層(8層)上面と黒褐色粘土層上面が遺構面になる。上面高は T. P. 21.4m を測る。遺構としては住居址状の土壌や性格不明の遺構が検出されている。



第97図 C区 縄文時代後期土層分布図

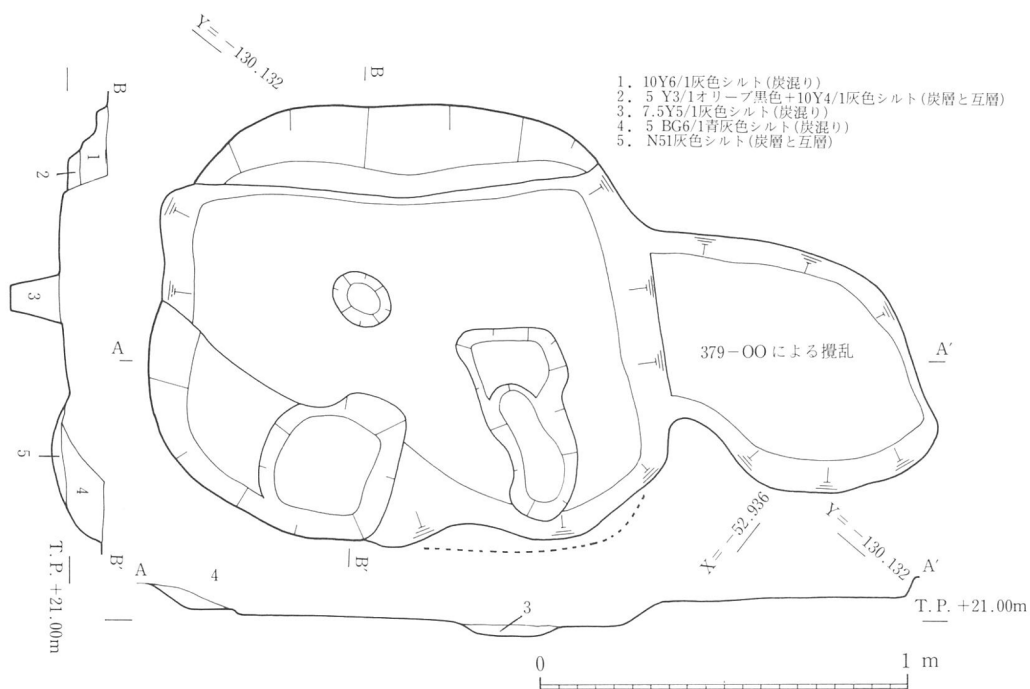
イ) 土 壌

400-00 (第98図、図版53)

遺構検出面は灰黄色粘土面にあたるが、遺構周辺では土質がシルト質に変わる。周辺には遺構を取りまく状態で炭塊や土器(図95-5、4、6)が分布している。遺構の残存状

況は悪く、上位にあたる粘土採掘坑379-00による改変が著しい。精査可能な箇所は遺構の縁辺と墳底の一部にすぎない。平面形は残存部からして一辺約2.5mを測る隅丸方形を呈すると推定される。深度は約20cm。埋土の下層にはシルトと炭層の互層が観察される。本来的な墳底の形状は不明だが部分的に不定形な落ち込みがある他、中央より少し離れた地点に柱穴状のピットがある。ピットは長軸約30cmを測る楕円形で、深度約28cmを測る。遺物は僅少で、落ち込み内より縄文時代後期と推定される土器片が検出されている。

遺構の性格としては、①平面形②遺構周辺の炭や土器の分布、を積極的に評価するなら住居址の可能性を指摘できる。



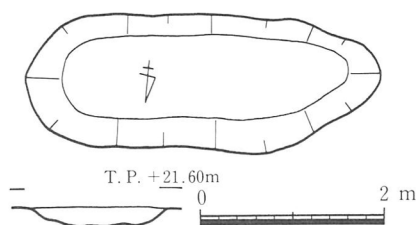
第98図 C区 400-00平・断面図

ロ) 性格不明遺構群 (第99図、図版54)

黒褐色粘土面で検出した。平面形で、土塊状、ピット状、溝状の三形態に分類できる。

これらの遺構の共通点として、①埋土には炭層や有機質に富む黒色土はみられず、粘土塊混りの明黄褐色粘土の単一層②遺構の輪郭は基盤である黒褐色粘土へ漸移的に変化し不明瞭であることが多い③遺物は未検出、の諸点が指摘できる。遺構自体から時期は決定できない。しかし、遺構基盤層である黒褐色粘土層上面が層的に灰黄色粘土層上面に共

通することから、その時期は縄文時代後期と推定できる。



第99図 C区 387-OX・平・断面図

土坑状遺構 387・388・389・392・395・398・421
がある。平面形は楕円形が多い。概して、断面は
浅い弧状を呈し深度は10cm前後を測る。法量の確
定する最大規模の387-OXで、長軸1.9m、短軸
0.7mを測る。深度約9cm。

ピット状遺構 391・396・397・418・419・420・

421・422・423がある。概して、径25cm前後の円形
を呈し、深度は5～10cmを測る。

溝状遺構 390・393・394がある。断面には逆梯形を呈する394や、浅い弧状を描く390など
がある。概して深度は浅く10～15cmを測る。

〈弥生時代〉

生活面に関する遺構は皆無。自然河川411-OR・412-OR、流路417-OSが相当する。
B区の自然河川・流路に比較して遺物量が少なく、時期決定が困難である。

イ) 自然河川

411-OR (第100・101図、図版56)

調査区の東側で検出した。黄色粘土I-3層を基盤に走行する自然河川で、走流方向を途中
で北東から北西へ変えB区北東隅を通過する。412-ORに先行し、B区587-ORに後出
する。幅約9.5m、深度1.7m以上を測る。堆積層は下層の厚さ10～30cmを測る自然木・植
物遺体集積層を除けば、大半が砂礫層である。一部右岸の黄色粘土II-7層に挟り込みをみせ、
極めて急激な流れであったことを推定させる。遺物は縄文土器3点と弥生土器1点が検出さ
れている。走流時期の決定は、自然河川という遺構の性格上極めて困難である。しかし、①基
盤が縄文時代晩期の黄色粘土I-3層である②B区589-ORに後出する③本遺跡の流路の下
限が古墳時代前期である、の諸点を検討すると、概ね弥生時代中期～後期の範疇になる。

出土土器 (第103図、図版83)

縄文土器(1～3)と弥生土器(4)がある。(1)は摩耗度が低く、近接する遺構からの流れ
込みの可能性が高い。縄文土器(1)有紋深鉢。体部上半が残存。頸部は大きく外反し、口縁
部は逆L字形を呈する。3単位の波頂と推定される。山形の波頂部には刺突のある8字状
貼付文が施され、波頂間の口縁部上側面には3組の刻目がみられる。頸部と胴部の境は沈
線で区画され、胴部の文様は沈線束による山形文と半円文で構成されている。ナデ調整。

北白川上層式⁽¹⁾2期。(2)注口土器。注口部は根元より先端にかけて徐々に細くなる形態である。胴部には注口部を半円形に巡る沈線束の文様帯が残る。内外面ともへら磨き。後期前葉か。(3)深鉢口縁部。内湾して伸びる口頸部で波状を呈すると推定される。口頸部の文様は斜行する2条の沈線と横位の沈線で構成される。沈線間には綾杉文状の刺突文が充填され、一部巻貝刺突文が施されている。沈線は巻貝による。弥生土器(4)鉢。復元口径34cmを測る。口頸部は体部より緩やかに外反し、口縁部は丸く薄く終わる。体部外面には細い擦痕が走る。植物質の原体か否かは不明。内面は原体不明の条痕調整。胎土は石粒の頻度・粒度が高い。類例に乏しいが、弥生時代前期か。

412-OR (第101・103図、図版56)

調査区のはほぼ中央を東西方向に走流する自然河川。411-ORに後出する。黄粘I-3層上面で検出した。幅4mm前後。深度約60cm。断面は扁平な弧状を描く。堆積層は粗砂と細砂の互層で、川底は南壁に近づくにつれて凹凸を呈するようになる。遺物は土器細片1点のみで、時期は不明である。411-OR同様走流時期を決めるには不確定要素が強いが、周辺の河川、流路との整合関係から弥生時代後期と推定される。

ロ) 溝

417-OS

〈中世以降〉

黄色粘土I-3層上面が遺構検出面である。直上は現代の耕土・床土にあたり、各時代の包含層は存在しない。耕作や粘土採取行為により大規模な削平を受けている結果である。遺構には溝、土壌があるが、性格等は不明瞭な点が多い。

イ) 溝 (第100・103図)

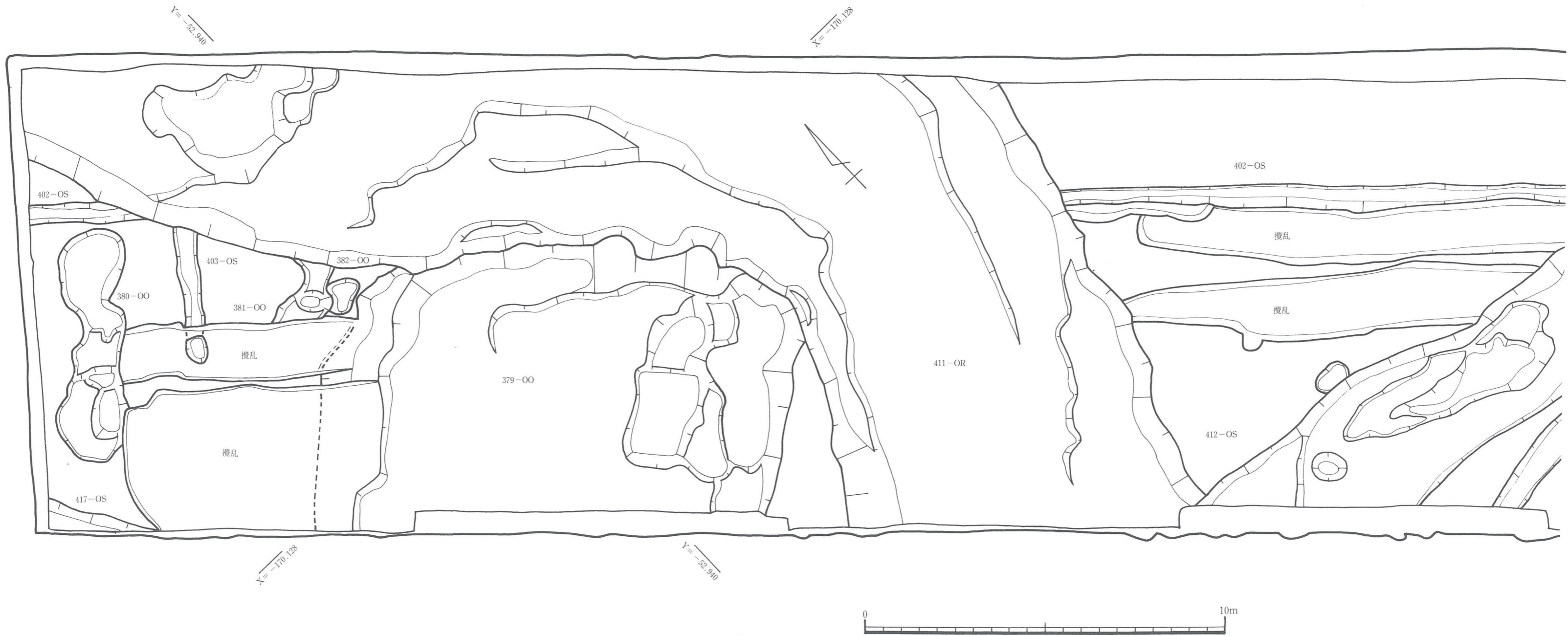
計7本検出されている。走行方向で2類型に分離できる。

(I類型) - 北東および北西方向に走る溝で、現在の条里制区割に一致する。402・403・408-OSがある。現代の溝。

(II類型) - 東西方向に走る溝で、埋土は全て共通し粘土塊混りの明黄褐色混砂土である。どの溝も部分的にしか残存せず、全容を知る資料はない。遺物は僅少で、404-OSより土師器片が一点検出されているのみである。最も安定している404-OSは、幅80~90cm、深度約10cmを測り、断面はV字形を呈する。

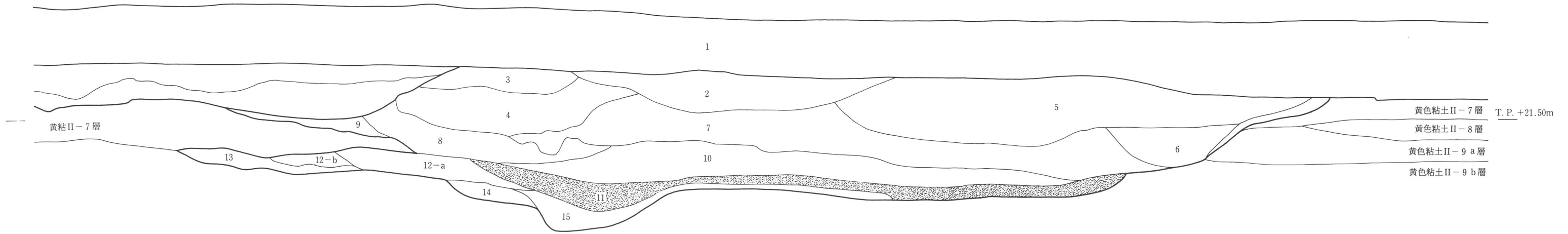
ロ) 土 壌

8基検出されている。382-OOと381-OOの埋土はともに粗砂混りで黄色粘土と灰色粘

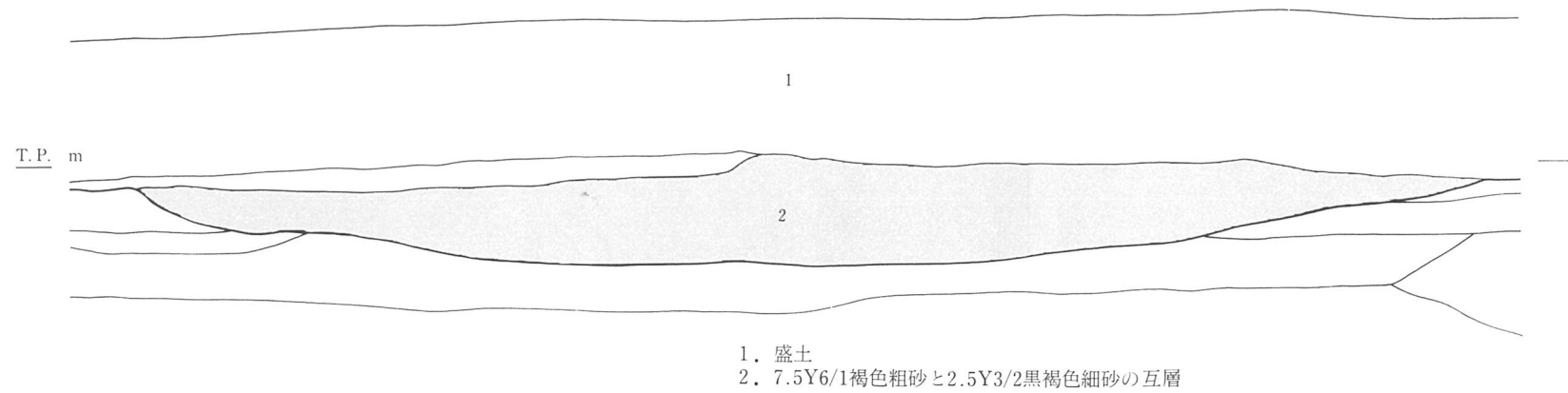


第100図 C区 遺構平面図(1)

411-OR 南壁断面



412-OS 北壁断面

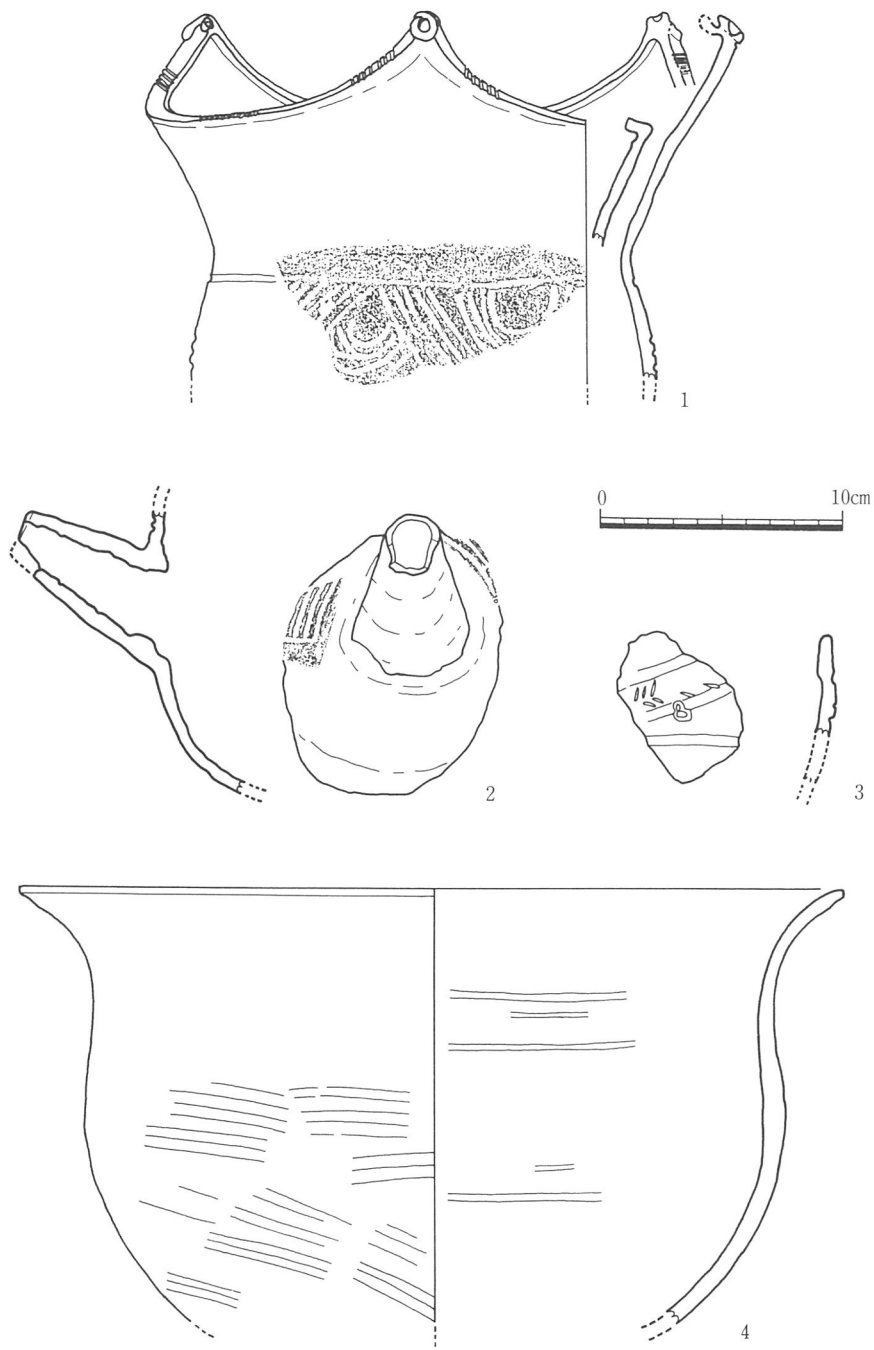


- | | |
|--------------------------|---------------------------------|
| 1. 盛土 (擁壁工事に伴う埋立) | 9. 10G 明緑灰色シルト |
| 2. 5 GY6/1 オリーブ黄色細砂 | 10. 10BG4/1 暗青灰色中礫層 |
| 3. 10Y6/1 灰色粗砂とシルトの互層 | 11. 2.5Y3/1 黒褐色シルト (自然木・植物遺体集積) |
| 4. 5 Y8/2 灰白色中礫 | 12-a. 10GY6/1 緑灰色細砂 |
| 5. 2.5Y8/1 灰白色小礫 | 12-b. 10GY6/1 緑灰色細砂～小礫 |
| 6. 5 YR5/6 明赤黄褐色中礫層 | 13. 7.5GY5/1 緑灰色シルト |
| 7. 10Y7/1 灰白色粗砂と細礫の互層 | 14. 7.5GY5/1 緑灰色シルト |
| 8. 5 BG7/1 明青灰色シルトと細砂の互層 | 15. 10Y6/1 灰色細礫 |

1. 盛土
2. 7.5Y6/1 褐色粗砂と2.5Y3/2 黒褐色細砂の互層



第101図 C区 411-OR・412-OS 断面図



第102图 C区 411-OR・出土土器 (S=1/3)

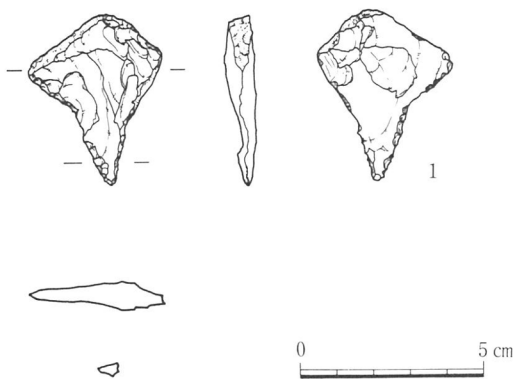
土がブロック状に混合するもので、B区の土壌群に類似する。379-00と383-00は、A₄区611-00と同様に昭和10年代の粘土採掘坑である。坑内埋土より各時代の遺物が検出されている。これらの遺物は周辺に本来的に存在していた遺構および包含層の時期を知る資料になる。

380-00 (第100図)

調査区の東側で検出された土壌で、長軸約8m、短軸60~80cmを測る。深度は20cmから30cmを測り、断面は浅い弧状を呈する。埋土は粗砂混りの褐灰色シルトで単一層である。遺物には、瓦質甕、土師質火鉢、軒丸瓦、染付塀等の細片、および石錐、サヌカイト片がある。概して近世遺物が主体を占める。

石錐 (第104図、図版83)

G06EN区出土。長さ4.61cm、つまみの幅3.62cm、厚さ0.82cm、7.6gを測る。2片に自然面を残す菱形の剥片の一端に若干の調整を施し錐部を形成している。先端から長さ7cmにわたり、刀部に弱い磨滅痕をもつ。石材はサヌカイトである。

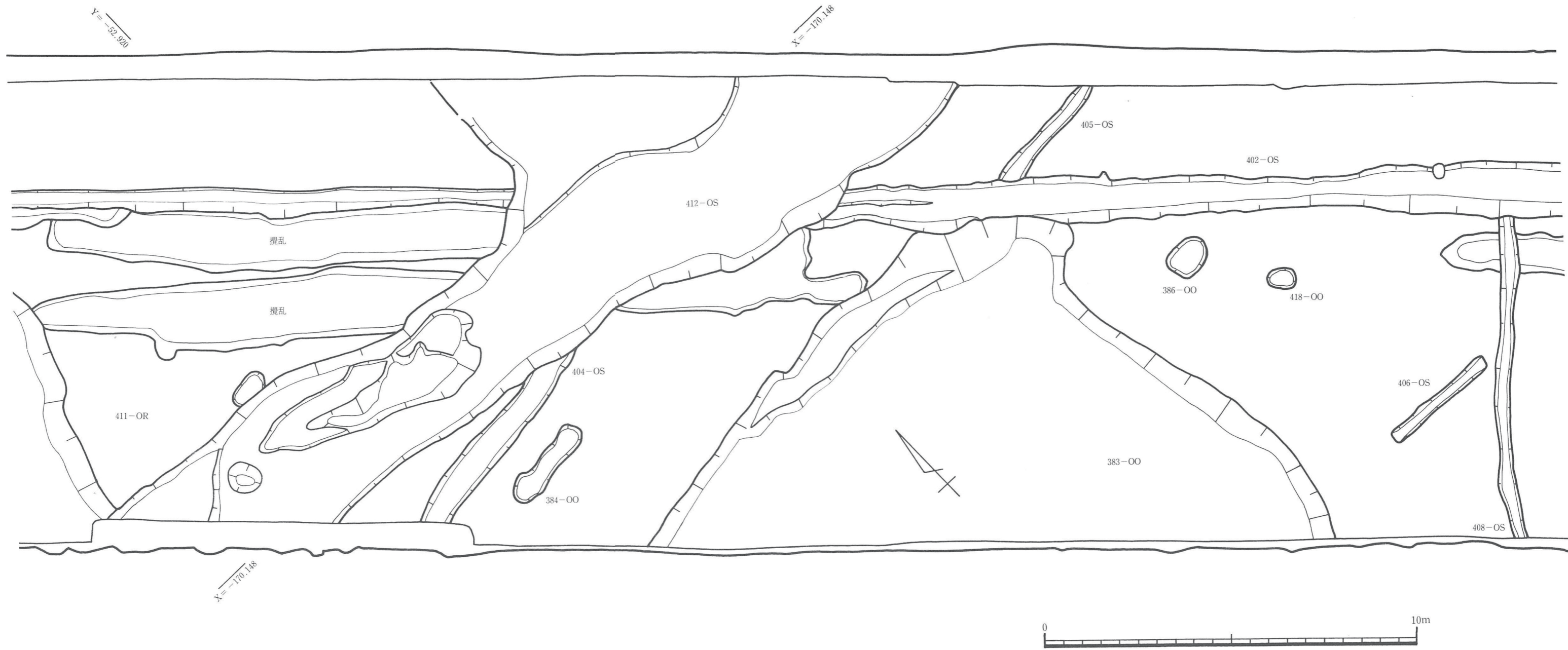


383-00 (第100・105図、図版84) 第104図 C区 380-00出土石器

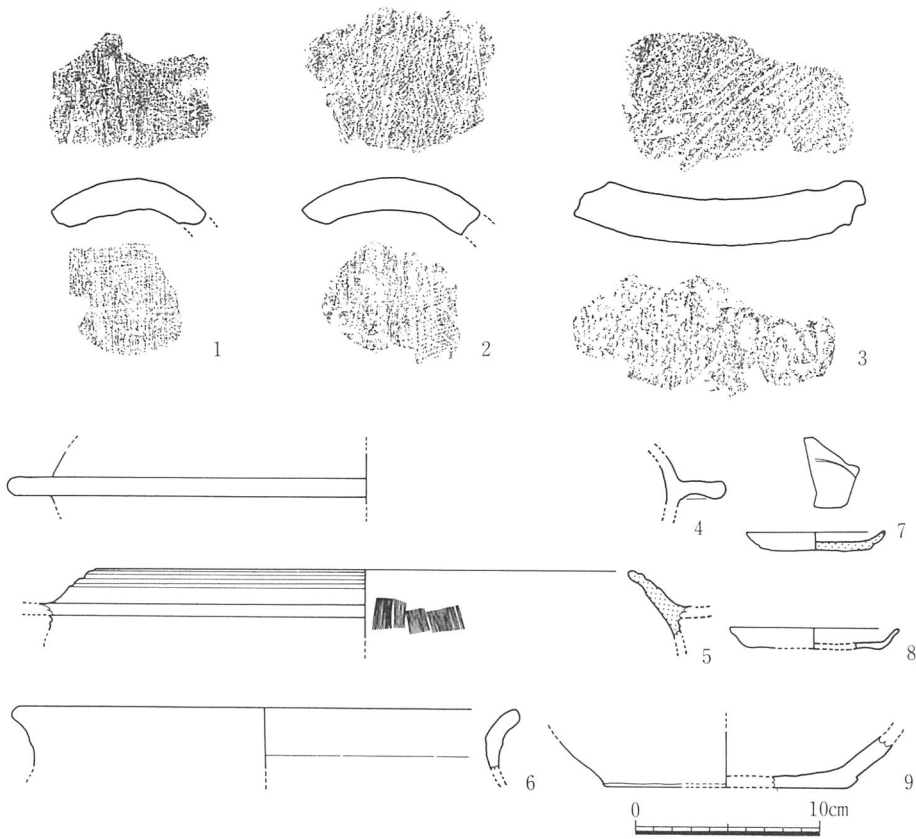
調査区のほぼ中央に位置する採掘坑で、一辺13m以上を測る。深度1m以上で、黒褐色粘土層に達している。坑底は平坦。遺物には、土師質小皿(8)、土師質羽釜(4)、瓦器塀、瓦質羽釜(5)、軒平瓦(3)等の破片と通称「甚衙唐鋏」と呼称される鉄製刃先(図版84)等がある。概して中世遺物が中心である。

379-00 (第103・105図、図版84)

調査区の西側で検出された粘土採掘坑で、一辺15m以上を測る。深度は1m以上で、坑底は黄粘III-8層に達し、400-00に改変を与えている。遺物には、縄文土器、弥生土器、畿内第V様式甕、サヌカイト片、埴輪、土師器(6)、瓦器塀、瓦器小皿(7)、瓦質羽釜、須恵質鉢(9)、軒平瓦(1、2)、不明鉄製品等の破片がある。奈良時代と平安時代を除けば、概ね各時代の遺物が出土している。



第103图 C区 遺構平面图(2)



第105図 C区 379-00・383-00出土土器他

c) 小 結

①黄色粘土の下層には全域に流木を含む礫層が広がり、本遺跡および周辺の地形を知る上で新たな知見になった。B区では礫層上に堆積する明緑灰色礫混り粘土より縄文時代前期末～中期前葉と推定される土器が検出されている。これにより礫層の形成時期は少なくとも先の時期より遡ることは確実で、本遺跡周辺が洪積段丘か否か再考する必要に迫られている。②周辺遺跡で通常地山層と推定される黄色粘土より遺物が検出され、その形成時期が概ね縄文時代後期より晩期であることが確認された。③黄色粘土層中より縄文時代後期の住居址状の土壌が検出された。400-00は、ほぼ中央に柱穴状のピットがあり面積が狭い点から貯蔵穴の可能性も指摘できるが、周辺に炭塊や土器片が分布することから住居址の可能性の方が高いと考えられる。④粘土採掘坑の埋土に各時代の遺物が混入していた。遺構密度は低くとも先の遺物に対応する遺構・包含層の存在を十分に予測させる。(小山田)

(註)

- (1) 縄文時代後期前葉・中葉・後葉の区分は、泉拓 良『近畿地方の土器』（後期）「縄文文化の研究」4、1981に拠る。又、後期土器型式名称もこれに拠る。なお、土器型式に関しては、本協会職員渡辺昌宏氏と宮野淳一氏に御教示願った。
- (2) 大阪府教育委員会『軽部池西遺跡発掘調査概要・II』1985
- (3) 縄文時代晩期の区分と型式名は、家根祥多『近畿地方の土器』（晩期）「縄文文化の研究」4、1981に拠る。
- (3) 井藤暁子「弥生式土器」『池上遺跡・第2分冊・土器編』（勸大阪文化財センター、1979
- (4) 寺沢 薫他『六条山』橿原考古学研究所編1978。以下、畿内第V様式での「 」付の土器成形手法は全て上記に拠る。
- (5) 渡辺 誠他『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館1975
- (6) 前掲書②使用する図は（試図……）と表記する。
- (7) 勸大阪府文化財センター『池上遺跡・第2分冊・土器編』1979
- (8) 前掲書⑦使用する図は（池上 fig……）と表記する。
- (9) 高島 徹・松村隆文『府中遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会1985、使用する図は（府中図版……）と表記する。

第4章 ま と め

以上、軽部池西遺跡の調査成果について、調査区西端から、A-1区、A-2区、A-3区、A-4区、B区、そしてC区の順序で各地区、時代別に説明を加えてきた。

本文の中でも叙べたように、基本的には、遺構は調査区全般において検出されており、その検出層位は、たとえば、A-1区のように、先ず、①にぶい黄橙色土層直上で中世小溝群ならびに土壌群（第1遺構面：14世紀以降）、②その下層の褐色粘土面直上で、中世小溝群および土壌群（第2遺構面：14世紀）、そして、③その下の明黄褐色土直上で、弥生時代後期遺構面といったように、少なくとも3枚の遺構面の検出される調査区域、或いはA-3区の東半・A-4区の西半のように、①黄褐色土直上の礫層堆積上面で、先ず弥生時代中期の遺構を検出し、なおかつ、②礫層堆積下の黄褐色土直上もしくは礫層のかぶりのない黄褐色土直上で、早くも縄文後・晩期以後、弥生時代、古墳時代を経て、古代、中世、近世に至る遺構との、2枚の遺構面の検出される個所、そして、B・C区のように、後世の大幅な削平の影響もあって、黄色粘土層直上面だけで、弥生時代から中～近世に至るまでの、きわめて時間幅の長い単位で遺構の検出される個所との、三様のタイプがあることが判明した。但し、全体的にみれば、黄褐色土直上で検出された遺構が、もっとも普遍的なしかたで検出されており、且つ、その検出範囲も、広汎であると言える。

具体的な遺構としては、先ず、縄文時代に関するものから整理すれば、A-3区、A-4区における自然流路335-OR、C区における土壌400-OO、その他、性格は不明であるが、同じくC区における土壌状・ピット状・溝状遺構など、土器・石器の類からみて、この時期に属するものである。B区などでは、一部、縄文時代前期末葉から中期前葉の土器も出土していると報告されているが、但し、遺構内からの出土遺物としては、北白川上層式を中心とする縄文時代後期の遺物（或いは晩期を含む可能性がある）がメインである。このように、軽部池西遺跡における明瞭な生活痕跡は、縄時代後期を、その明確な上限とすることができる。

次に、軽部池西遺跡の弥生時代については、遺物から見るかぎり、特にB区の所見に従う時、畿内第I様式から第V様式までの土器を見いだすことができる。但し、遺構との一括関係という視点を重視するならば、今回の調査において明瞭となるのは、弥生時代中期(III～IV様式)ならびに、弥生時代後期（V様式）後半の遺構・遺物である。具体的には、弥

生時代中期の色彩が濃厚なのは、A-3区およびA-4区付近であったが、たとえばA-3区の礫層上面で検出された土壙328-OO、黄褐色土層直上で検出された土壙を伴う方台式遺構370-OX~378-OXのうちの、373-OX内の主体部324-OO、A-4区における598-OOなどがそれである。一方、弥生時代後期の遺構・遺物の一括関係としては、A-1区における竪穴住居址117-OD、土器溜240-OX、その他、同じく後期土器を伴うピット群、加えてA-2区における土壙290-OO、303-OO、B区における溝状遺構546-OS、547-OS（但し、滋賀里式III bも共伴）、C区における自然河川411-OR（同じく、縄文土器共伴）、更に412-ORなどを挙げることができる。当時、B区における自然河川589-ORは、後期前半には、既に埋もれていたと考えられているが、いずれにせよ、当時の人々が、弥生時代中期後半もしくは後期後半に至って、当地を比較的に固定的な意味での居住域・墓域として意識しはじめていたことは、叙上の遺構のあり方から明らかである。

次に、軽部池西遺跡の古墳時代についてであるが、本文でも述べたように、調査区全域を通じて、古墳時代の遺構・遺物はきわめて少なく、遺物が遺構とともに、ほぼ明確なかたちで検出される例はと言えば、僅かにA-4区における掘立柱建物621-OBくらいのものである。従って、当該調査区は、たとえば、国の指定史跡である摩湯山古墳や近接の久米田古墳群の造墓主体、或いは集団の主要な構成要素という見地からすれば、その可能性は殆んど皆無に近いと言わざるを得ない。

奈良時代以後、中・近世に関していえば、先ず、A-3区において、掘立柱建物跡345-OBが検出されているが、未だ、周辺の条里の軸とは符合しておらず、古代末期～中世初頭以前の遺構である可能性が強い。B区においても、1間×2間の掘立柱建物跡510-OBが検出されているが、周辺のピット群と同じく、中世の年代が与えられている。他に、建物以外の遺構として、この建物の軸とほぼ一致する方向でのB区内柵列577-OF、前述したA-1区での小溝群（二面検出）、A-2区・C区における溝状遺構243-OS、402-OS、403-OS、408-OS、そして調査区全般を通じて検出される土壙群592-OO、593-OO、602-OO、605-OO（以上、A-4区）、379-OO、383-OO（以上、C区）などが検出されることとなったが、これらの遺構の性格から推すならば、中～近世における当地の利用状況は、ほぼ、耕作地としての機能をはたしていたと見なしてよいであろう。この土地利用のあり方は、基本的には、近～現代にまで受けつがれている。

さて、以上が、今般の軽部池西遺跡の発掘調査所見であるが、最後に、今回の発掘調査成果の意義づけと、今後の問題点について、若干、ふれておくことにする。

今回の調査で、よりいっそう明確になった第1の点は、遺構がその上面で普遍的に検出される明黄褐色土層そのものが、従来考えられていたような「洪積層」ではなく、「沖積層」であることが確認されたという点である。この「黄色粘土」層がいわゆる「地山」層ではなく、少なくとも縄文時代後期の土器を伴う「沖積層」であることは、たとえば、昭和54年度の大阪府教育委員会の手になる「第2 阪和国道内遺跡発掘調査概報－板原遺跡－」の中で明らかにされていたが、今般の調査によっても、黄色粘土層内から、縄文時代後・晩期の土器の出土を見、それによってこの層位が、明らかに「沖積層」であることが判明したことは、重要な追認成果のひとつである。なお、この黄色粘土層下において、調査区全体に広がる広汎な礫層堆積が検出されているが、この礫層の年代についても、今回、出土した有機遺物（流木）の年代測定などを通じて、より明確にされていく必要がある（「放射性炭素による年代決定」法の有効性とその是非については、1952年発行の W. F. リビー氏による同名の著作のほか、1969年、スウェーデンのウプサラで開催された会議議事録「第12回ノーベル・シンポジウム：放射性炭素による年代測定上の偏差と絶対年代」1970年版などを参照されたい）。いずれにせよ、当該区における黄色粘土層の拡散する地域全体を、従来のごとく、安易に「洪積段丘」と呼びきってしまうことについては、十分、慎重であった方がよい。

調査成果の第2の点は、弥生時代に関するものであるが、今回の調査によって、弥生時代中期（畿内第Ⅲ～Ⅳ様式）に属する台状遺構や土壇、そして弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式）に属する竪穴住居址や土壇が明らかとなったことは大きな成果である。まず、台状遺構そのものについて言えば、370-OX や371-OX、372-OX などが単数埋葬であり、また遺物を共伴しないのに対し、他方、373-OX は複数埋葬であり、しかもそれら主体部のうち、ただ324-OO に対してのみ、土器の供献がなされているのは、確かに注意をひく現象のひとつである。何故なら、既に報告したように、通例的には台状部内で検出される主体部土壇内からは、殆んどの場合、遺物が出土しないというのが、一般だからである。今後、これら被葬者の扱いの相異が、いったい何に基ざっているのか、明らかにされる必要がある。また、土壇に関して言うならば、本調査区で検出された土壇には、主として、隅丸長方形もしくは楕円形のプランをもつものと、他方、ほぼ円形に近いプランをもつものとの二種があることが判明したが、傾向としては、前者には遺物共伴の類例が少なく、一方、後者においては、遺物を伴う場合と伴わない場合との2つの様態があることが明らかとなった。この事実は、恐らく多分に、土壇そのものの機能および性格に起因しているもの

と考えられるが、前者は主として「土壙墓」、後者は主として「土壙墓」のほか、「生活遺物廃棄用土壙」や、もしくは「粘土採掘痕」の性格を有するものであらうと考えている。実際上の類型は、勿論これほどまでに簡明ではなく、よりいっそう複雑な様相を呈していたものと考えられるが、いずれにせよ、ここで大切なことがらは、特に「土壙墓」に注目して、それによって反映されている社会的背景を探るかぎり、当時（弥生時代中期）の社会の階級性は、共同体の長と成員との間の隔絶感をほとんど感じさせない、原始共同体的色彩の濃厚な、言わば「階級社会」としては、甚だ未成熟な段階での社会のように映ずるのである。しかし、これはあくまでも、現時点における印象的な到達点であって、今後、さらに全般的かつ詳密な検討が必要であることは、言うまでもない。

次に、第3の点として注意を払っておきたいのは、当該調査区で検出された、弥生時代中期における礫層堆積もしくは砂層堆積の問題と、もうひとつ、文化相としての弥生時代後期前半の欠落という問題である。ここで、何故この問題をとりあげるかという、同様の現象が、昭和54年度に大阪府教育委員会の手によってなされた、近接地での和気遺跡の発掘調査の際にも、観察されたからである。詳しくは、「和気遺跡発掘調査概要報告書」の報文を参照願いたいだが、とりわけ調査区南端のWK-III(S)区という、松尾川に最も近いところで、弥生時代中期（畿内第III～IV様式）の水田址（泉州では初見）が検出されており、この中期水田を覆うかたちで、厚さ約20～30cm前後をはかる茶灰色の砂層堆積が確認されていること、また検出された竪穴住居址（合計11棟）や土壙群の時代的要素に注目する時、弥生時代中期後半にあたる時期と弥生時代後期後半から庄内期にかけての生活痕跡とは明瞭に把握できるのに、その過渡の時代、すなわち弥生時代後期前半については、その生活痕跡を、遺構・遺物の一括関係からは論証できないこと、これらの所見については、今般の「軽部池西遺跡」の発掘調査成果を全般的に見直す時にも、やはり同様の結論に到達せざるを得ない。この結論は、丁度、先にあげた「和気遺跡」の発掘調査と同年度に、同じく府教委によって実施された調査の成果、「軽部池西遺跡試掘調査概要報告書・II」第IV章「結語」の中で論述されていた予測・見通しをほぼ追認する結果となったわけであるが、いずれにせよ、今のべた両遺跡における二点の類似性は重要である。特に弥生時代後期前半の欠落については、かつて、中国史書の叙べる「倭国大乱」との関連で、近隣の弥生時代後期の代表的な軍事的高地性集落である「観音寺山遺跡」への、周辺部共同体の軍事的編成・軍事的結束に伴う「統合的移動」に起因すると説いたことがあるが、基本的には、今もその考えは正しいものと考えている。ひき続き、周辺部各地での、当該期における遺跡調査の

動向ならびに成果に、注目していきたい。

最後に、第4の問題点としてとりあげておきたいのは、「軽部池」そのものと「条里制」との関連の問題である。

さて、「軽部池」そのものの文献的記載については、周知のごとく「大日本古文書」二に所収の、天平19年(747年)2月11日の日付をもつ「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」が有名であるが、「法隆寺領莊園」に関する関連部分の前後を拾い出してみると、「合池陸塘 大倭国平群郡寺辺三塘 河内国和泉郡軽郷六塘 摂津国菟原郡宇治郷一塘 播磨国揖保郡佐々山池一塘」と記載されている。但し、この中の「軽郷六塘」については、記録の前後の関係や、「続群書類従釈家部」所載の「法隆寺縁起資財帳」を根拠にして、正しくは「一塘」の誤りであるとの修正案もある(「和泉市史」第一巻 163頁 和泉市史編纂委員会1965年)が恐らく、この後者の指摘は正鵠を射ているものと考えられる。そして、同書が叙べるように、この一塘を「軽部池」そのものに比定するという見方に基本的には賛成であるが、ただし、現在の形状の軽部池の成立年代について、「池全体が条里制に完全にそっていること」を唯一の理由として、「七世紀中葉以降、天平十九年までに築かれたものであ

和泉郡軽郷	和泉郡	法隆寺は和泉国に所領を持つ
合池陸塘	右在播磨国印南郡与飭磨郡間	三 法隆寺伽藍縁起并流記資財帳 天平十九年(七四七)
大倭国平群郡寺辺三塘	河内国和泉郡軽郷六塘	(前略)
摂津国菟原郡宇治郷一塘	播磨国揖保郡佐々山池一塘	都合本記地壹佰壹拾陸万参仟壹佰肆拾代
合処処庄肆拾陸処		成町二千三百廿六町二段二百八十八步
		合水田参佰玖拾陸町参段貳佰拾壹步参尺陸寸
		十三町七段読涅槃經料
		六十九町四段九十八步功德分料
		六十八町卅三步衆僧衣分料
		二百卅一町九段七十步食分料
		十三町三段十步三尺六寸寺主分料
		近江国栗太郡貳拾壹町漆段壹佰肆拾肆步
		大倭国肆拾玖町壹段伍拾漆步参尺陸寸
		平群郡卅六町九段二百一步三尺六寸
		添上郡二町一段二百十六步
		河内国捌拾漆町陸段壹佰捌拾漆步
		志貴郡一町 渡川郡卅六町二段百八十七步
		更浦郡卅町 和泉郡卅五町九段
		合海式渚

(「大日本古文書」二所収)

る」と断定してしまうことには、大いに抵抗がある。なぜなら、現在、和泉府中付近を中心に観察される、いわゆる「条里」軸の上限年代は、現在までの考古学的知見による限り、せいぜい古くても、11世紀後半から13世紀くらい(今回のA区における、スキミゾに伴う条里軸の時代性は、14世紀もしくはそれ以後であった)までであって、現在の「軽部池」の軸性そのものが、果して、7～8世紀段階まで溯及できるかどうかは、大いに疑問であり、今後の課題である。わたくし自身は、現在の条里の起源が、ほぼ11世紀後半にまで溯及できるという事実に立脚して、たとえば、寛徳二年(1045A. D.)における「寛徳の荘園整理令」、また延久元年(1069A. D.)における「延久の荘園整理令」などといった、当時の荘園改革の流れの中で、とりわけ、「永承五年(1050A. D.)の荘園整理令」(この年、和泉国の新立荘園及び寄人の停止が命ぜられた。「平安遺文」681号参照)との関わりの中で、目下のところ、把えようと試みている。換言すれば、「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」の中に記されている「河内国和泉郡軽郷」所在の「池一塘」は、確かに「軽部池」と呼称可能な池であったとしても、但し、当時の「軽部池」の形態・軸性は、現在の「軽部池」にみるようなそれではなく、より自然的な、本来の地形的要素を多分にとどめたものであり、恐らく、軸性も、現在観察される「条里軸」とは、大いに異っていたのではないかと推定している。そして、「軽部池」そのものが基本的に現在の形態・軸性に到達しえたのは、上述の11世紀後半の、相継ぐ「荘園整理」の動勢の中でのことではなかったかと考えている。

以上、今回の発掘調査成果の意義づけと、今後の課題もしくは問題点について言及してきたのであるが、報文の中でも論述したように、周辺の遺跡環境のあり方は、A-4区内大型土壇611-OOが端的に示していたように、多種多彩である。今後の調査とその成果にいつその期待をかけて、本稿をとじることにする。(久米) (完)

付章 花粉分析・珪藻分析結果報告

当分析調査は、発掘調査に伴ってトレンチ側壁より採取された土層の試料を対象として、花粉分析ならびに珪藻分析を行い、各時代における遺跡およびその周辺の植生や水域の状況等の古環境を推定・復元するために行ったものである。

I 分析結果

A) 花粉分析結果の概要

(1) 花粉化石の含有状況

全調査区において、10地点延べ29試料の花粉分析を行った結果、26試料は花粉化石を含有していたが、そのうちNo.1地点の試料No.2、4、No.7地点の試料No.16、No.9地点の試料No.22、25の5試料は化石の含有量が少なく、No.1地点の試料、No.3、No.4地点の試料、No.10、No.5地点の試料、No.12、No.6地点の試料、No.13、No.7地点の試料、No.17、18、No.9地点の試料、No.21、23、26の9試料は化石の含有量が極少なかった。

含有量の極少ない9試料と化石を含有していなかった3試料は分析結果から除外した。

(2) 検出された花粉化石の種類

延べ26試料から検出された花粉化石の種類は、表3-1に示す42種類である。

これらのうち、全試料を通じて花粉組成を特徴づける種類は以下のようなものである。

① 卓越樹木花粉

アカガシ亜属、コナラ亜属、ニヨウマツ亜属、スギ属、コウヤマキ属、シイノキ属

② 卓越草本花粉

イネ科

③ 栽培種花粉

イネ科 (>40)

イネ科 (>40) はイネ科のうち、花粉粒径が 40μ 以上のものを示しており、イネ属 (*Oryza*)を含んでいると考えられるが、表5のようにそのすべてがイネ属であるとは断定出来ない。

(3) 花粉組成の変遷傾向と分帯

土層の区分との対応から、花粉組成の変遷傾向が連続的に検討できる地点はなかったが、

花粉組成の類似性と各土層に与えられた編年・切り合い関係をもとに、各土層の層序的グルーピング、つまり花粉分帯を行った結果は以下のようである。

① 縄文時代前期末～縄文時代中期初

No.4 地点の試料No.11のみが該当するが、花粉化石が検出されず、不明である。

② 縄文時代後期（下）：I 帯

No.1 地点の試料No.4のみが該当するが、前記のように化石の含有量が少ないために、データの信頼性はやや低い。

自然植生要素であるアカガシ亜属、コナラ亜属、コウヤマキ属、ツガ属が主体を占めるが、人為要素であるニヨウマツ亜属、イネ科 (>40) も出現する。これをI帯とする。

③ 縄文時代後期（上）：II 帯

自然植生要素であるアカガシ亜属、コナラ亜属、ツガ属が主体を占め、特にアカガシ亜属は高率に出現する。また草本の出現率は低く、イネ科 (>40) は出現しない。これをII帯とする。

④ 縄文時代後期～弥生時代後期（下）：III 帯

No.1 地点の試料No.2のみが該当するが、前記のように化石の含有量が少ないために、データの信頼性はやや低い。

自然植生要素であるアカガシ亜属、コナラ亜属などの出現率が下位のII帯と上位のIV帯（後述）より低く、人為要素であるニヨウマツ亜属、イネ科 (>40) の出現率が高い。これをIII帯とする。

⑤ 縄文時代後期～弥生時代後期（上）：IV 帯

自然植生要素であるアカガシ亜属、コナラ亜属、シイノキ属が主体を占める。またイネ科 (>40) も出現する。これをIV帯とする。

⑥ 弥生時代後期～近世：V 帯

自然植生要素であるアカガシ亜属、コナラ亜属、コウヤマキ属が主体を占める。IV帯にくらべ草本の出現率が高く、人為要素であるニヨウマツ亜属、スギ属、イネ科 (>40) の出現率も高い。これをV帯とする。

⑦ 近代～現代：VI 帯

人為要素であるニヨウマツ亜属、スギ属、イネ科 (>40) が主体を占め、全体に草本の出現率が高い。これをVI帯とする。

[主要樹木花粉種類]

1	Podocarpus	(イヌマキ属)
2	Diploxylon	(ニヨウマツ亜属)
3	Haploxylon	(ゴヨウマツ亜属)
4	Picea	(トウヒ属)
5	Abies	(モミ属)
6	Tsuga	(ツガ属)
8	Cryptomeria	(スギ属)
9	TAXODIACEAE	(スギ科 *スギ属を除く)
10	Sciadopitys	(コウヤマキ属)
11	CUPRESSACEAE	(ヒノキ科)
12	Alnus	(ハンノキ属)
13	Betula	(カバノキ属)
14	Carpinus	(クマシデ属)
15	Corylus	(ハシバミ属)
16	Cyclobalanopsis	(アカガシ亜属)
17	Quercus	(コナラ亜属)
18	Fagus	(ブナ属)
19	Castanopsis	(シイノキ属)
20	Castanea	(クリ属)
21	Juglans	(クルミ属)
22	Pterocarya	(サワグルミ属)
23	Ulmus	(ニレ属)
24	Zelkova	(ケヤキ属)
25	Celtis	(エノキ属)

表5 検出された花粉化石の一覧表(1)

[主要草本花粉種類]

26	GRAMINEAE	(イネ科)
27	CYPERACEAE	(カヤツリグサ科)
28	Artemisia	(ヨモギ属)
29	Taraxacum	(タンポポ亜科)
30	COMPOSITAE	(キク科 *ヨモギ属、タンポポ亜科を除く)

[その他の樹木花粉種類]

31	Ilex	(モチノキ属)
32	Acer	(カエデ属)
36	Myrica	(ヤマモモ属)
38	EUPHORBIACEAE	(トウダイグサ科)
53	ERICACEAE	(ツツジ科)

[その他の草本花粉種類]

44	Typha	(ガマ属)
45	CHENOPODIACEAE	(アカザ科)
46	CARYOPHYLLACEAE	(ナデシコ科)
47	POLYGONACEAE	(タデ科)
49	CAPRIFOLIACEAE	(スイカズラ科)
54	GRAMINEAE (>40)	(40ミクロン以上のイネ科)
55	Thalictrum	(カラマツソウ属)
56	UMBELLIFERAE	(セリ科)

表5 検出された花粉化石の一覧表(2)

B) 珪藻分析結果の概要

(1) 珪藻化石の含有状況

先と同じく、10地点で延べ29試料の珪藻分析を行った結果、5試料は珪藻化石を含有していたが、No.1地点の試料No.4、No.4地点の試料No.11の2試料は化石の含有量が極少なかった。含有量の極少少ない2試料と化石を含有していなかった24試料は分析結果から除外した。

化石の含有量が少ない理由は前に記した通りであるが、化石を含有する試料についても、後でふれるように珪藻化石組成から推定される水域環境がそのままその部分の土層の堆積環境であるかどうかについては、疑問のものが多く、大半は異地点に堆積した地層から堆積物粒子とともに再移動したものである可能性が大きい。

(2) 検出された珪藻化石の種類

検出された珪藻化石の種類は、表6に示す33種類である。

1	<i>Achnanthes</i> spp.	(ツメケイソウ属)
2	<i>Actynocyclus</i> <i>kuetzingii</i>	(アクチノキクルス属)
3	<i>A. normanii</i>	()
4	<i>Actynoptychus</i> <i>undulatus</i>	(アクチノプティクス属)
5	<i>A.</i> spp.	()
6	<i>Cocconeis</i> <i>placentula</i>	(コメツブケイソウ属)
7	<i>Coscinodiscus</i> <i>perforatus</i>	(コアミケイソウ属)
8	<i>C.</i> spp.	()
9	<i>Cyclotella</i> <i>stelligera</i>	(ヒメマルケイソウ属)
10	<i>C. striata</i>	()
11	<i>Cymbella</i> <i>aspera</i>	(クチビルケイソウ属)
12	<i>C. turugidula</i>	()
13	<i>C. turugidula</i> var. <i>nipponica</i>	()
14	<i>Epithemia</i> <i>zebra</i>	(エピテミア属)
15	<i>E.</i> spp.	()
16	<i>Eunotia</i> <i>pararella</i>	(イチモンジケイソウ属)
17	<i>E.</i> spp.	()
18	<i>Gomphonema</i> <i>parvulum</i>	(クサビケイソウ属)

19	<i>Melosira ambigua</i>	(メロシラ属)
20	<i>M. granulata</i>	(//)
21	<i>M. pensacolas</i>	(//)
22	<i>M. roseana</i>	(//)
23	<i>M. sulcata</i>	(//)
24	<i>M. varians</i>	(//)
25	<i>M. spp.</i>	(//)
26	<i>Navicula spp.</i>	(フネケイソウ属)
27	<i>Nitzschia cocconeiformis</i>	(ニッチア属)
28	<i>N. spp.</i>	(//)
29	<i>Pinnularia spp.</i>	(ハネケイソウ属)
30	<i>Surirella robsuta</i>	(コバンケイソウ属)
31	<i>Synedra ulna</i>	(ハリケイソウ属)
32	<i>Tharassiosira bramaptrae</i>	(タラシオッシラ属)
33	<i>T. spp.</i>	(//)

表6 検出された珪藻化石の種類の一覧表

これらのうち、珪藻組成を特徴づける種類は以下のようである。

卓越種類

Actinocyclus 属	<i>A. normanii</i>	*
Cyclotella 属	<i>C. striata</i>	*
Melosira 属	<i>M. granulata</i>	
	<i>M. roseana</i>	
Tharassiosira 属	<i>T. bramaptrae</i>	*

*印を付した種類は海水域の浮遊性の種類である。

II 植生・環境の考察

A) 土層区分と花粉分帯

発掘調査時の土層区分と、花粉構成ならびにその変遷に基づく花粉分帯の関係をまとめると以下のようである。

各土層のうちで遺物等からその時代が特定されているのは、縄文時代後期 (No.2 地点の

第12層、No. 8 地点の下層) と弥生時代後期 (No. 3 地点の第 3 層～第 4 層、No. 7 地点の第 2 層～第 4 層) に相当する 2 層準である。

このうち前者に対応する花粉帯はII帯であり、後者に対応する花粉帯はIV帯及びV帯である。つまり、弥生時代後期 (第 V 様式) の土層はIV帯、V帯の 2 花粉帯に細分される。

花粉組成の特徴とその変遷により設定した「花粉帯 (Pollen assemblage zone)」は、遺跡およびその周辺後背地の植生状況を反映したものであるから、異なる調査地点間で花粉組成の特徴が類似し同一の花粉帯であると判断した土層 (試料) はほぼ同時期の堆積物と考えることができ、遺跡での土層の区分・対比に花粉データを応用することができる。

一方、花粉データに基づいて植生の変遷を検討する場合、基礎となる花粉組成やその変遷が、一地点の特殊なものでなく、遺跡全体に共通性を有するものであることの確認は、上記のように複数地点間の花粉データの比較・対比が不可欠である。

時代	花粉帯	以上の考え方に基づいて、設定した花粉帯の対比を試みると、B 地区においては、No. 1 地点で I 帯と III～IV 帯、No. 2 地点で II 帯、No. 3 地点で IV 帯～V 帯、No. 4 地点で IV 帯、No. 7 地点で II 帯と IV 帯～V 帯に対応する花粉組成の土層が見出せる。
近代～現代 (古墳～近世)	VI 帯	
弥生時代 後期	V 帯	A-4 地区においては、No. 9 地点で IV～V 帯、No. 10 地点で V～VI 帯に対応するものがある。
	IV 帯	遺構の堆積物を対象とした No. 8 地点の花粉組成は、II 帯と IV 帯に相当するものと判断される。
	III 帯	このような花粉帯による土層の区分と対比が妥当なものであるかどうかは今後の課題であるが、遺物による土層区分が未確定の場合には、花粉帯を土層区分の目安とすることができる。
縄文時代 後期	II 帯	
	I 帯	
縄文前期末～中期初		

B) 遺跡およびその周辺の植生変遷

報告書に述べた土層区分と花粉帯の対応関係をもとに、各花粉帯の特徴と推定される植生状況ならびに堆積環境を示したものが表 7 である。このうち、縄文時代前期末～縄文時代中期初の層からは花粉化石が検出されなかったため状況は不明である。また、I 帯および III 帯では花粉化石の検出数量が少ないのでデータの信頼性が低い。

(1) 樹木植生の変遷

樹木花粉種類は、遺跡近傍の植生だけでなく、後背流域の丘陵地や山地から供給されたものも混在している。その根拠としては、本来植生帯域を異にする暖温带広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の要素と冷温带広葉樹林や針葉樹林の要素が単一の試料から同時に検出される事実が挙げられる。

従って検出された花粉化石群集は、周辺低地の植生と遠方の丘陵・山地の植生に分離して植生を推定する必要がある。

花粉帯のⅠ帯からⅥ帯にかけては、以下のような樹林植生の変遷が推定される。

①Ⅰ帯：低地部では照葉樹林であるカシ林と二次林であるアカマツ・クロマツ林が分布する。丘陵・山地部ではツガ、スギ、コウヤマキなどの温帯針葉樹林が分布する。

②Ⅱ帯：低地部ではカシ林が卓越し、自然植生の度合いが高い。丘陵・山地部ではモミ・ツガ・スギ・コウヤマキ林が分布する。

③Ⅲ帯：低地部ではアカマツ・クロマツ林、カシ林、ヤマモモ林が分布する。丘陵・山

時代	花粉帯	産出花粉の特徴				推定植生	産出珪藻の種類	推定堆積環境	
		卓越樹木花粉	特徴樹木花粉	卓越草本花粉	特徴草本花粉				
近代～現代	Ⅵ	ニヨウマツ亜属 スギ属	イヌマキ属 アカガシ亜属	イネ科 イネ科(>40)	キク科 アカザ科	低地では草地優勢 森林の二次林化一層 進む 水田・耕作地	—	—	
(古墳～近世)	Ⅴ	アカガシ亜属 スギ属 コナラ亜属	モミ属 ツガ属 コウヤマキ属 イヌマキ属 シイノキ属	イネ科	イネ科(>40) ヨモギ属 セリ科	低地はカシ林、アベ マキ・クスギ林。山 地ではスギ林の拡大 二次林化と草地拡大 イネ栽培の可能性あ り	Actinocyclus 属 Tharassiosira 属 Cyclotella 属 Pinnularia 属	淡水の影響が弱い 汽水域 本来は小河川または 湿原	
弥生時代 後期		Ⅳ	アカガシ亜属 コナラ亜属	ツガ属 スギ属 コウヤマキ属 シイノキ属 エノキ属	イネ科	イネ科(>40) ヨモギ属 セリ科	低地はカシ林、アベ マキ・クスギ林。山 地はツガ、スギ、コ ウヤマキ林 草地拡大	Actinocyclus 属 Tharassiosira 属 Melosira 属 Cymbella 属 Pinnularia 属	淡水の影響が強い 汽水域 本来は小河川または 湿原
		Ⅲ	スギ属	ニヨウマツ亜属 アカガシ亜属 ヤマモモ属	イネ科	イネ科(>40) タデ科	花粉含有量少ない 低地はカシ林の縮小 山地はスギ林の拡大 イネ栽培の可能性あ り	—	—
縄文時代 後期	Ⅱ	アカガシ亜属	コナラ亜属 シイノキ属 スギ属 コウヤマキ属	—	イネ科 スイカズラ科	低地はカシ林卓越 山地はスギ、コウヤ マキ林 自然植生の度合い高 い 草地少ない	—	—	
	Ⅰ	ニヨウマツ亜属 アカガシ亜属	コナラ亜属 ツガ属 スギ属 コウヤマキ属	イネ科	イネ科(>40)	花粉含有量少ない 低地はカシ林、アカ マツ・クロマツ林。 山地はツガ・スギ・ コウヤマキ林	—	—	
縄文時代前期末 縄文時代中期初		不明	—	—	—	—	—	—	

表7 軽部池西遺跡の古植生・堆積環境

地部ではスギ、ヒノキが分布する。

④IV帯：低地部ではカシ林、アベマキ・クヌギ林、コナラ林が分布する。二次林が拡大する傾向にあるが依然カシ林が優勢で比較的自然植生の度合いが高い。丘陵・山地部ではモミ・ツガ・スギ・コウヤマキ林が分布する。

⑤V帯：低地部ではカシ林、アベマキ・クヌギ林、コナラ林が分布し、カシ林は若干縮小する。丘陵・山地部ではモミ・ツガ・スギ・コウヤマキ林が分布し、スギ林の拡大が顕著である。

⑥VI帯：低地部では二次林であるアカマツ・クロマツ林が卓越する。丘陵・山地部ではモミ、ツガ、コウヤマキ林が縮小し、植林と考えられるスギ林が拡大する。

(2) 草本植生ならびに栽培植物の変遷

樹林花粉数の合計を基数とした草本花粉の比率はI帯からIII帯にかけて低率で、IV帯より上位で高率となる傾向を示す。

草本花粉は樹林花粉にくらべると遠方からの移動混入は少ないと考えられるので、この傾向はそのまま遺跡周辺での草地の状況を反映しているものと判断される。

イネ科以外の草本花粉種類は水田の田畔ないし乾燥裸地に一般的なものが多く、特に顕著な変遷は認められない。

イネ科のうち、イネ属を含む粒径40ミクロン以上の花粉はII帯を除く各帯で検出されている。その出現率はI帯とIV帯では低く、III帯とV帯では高く、VI帯で最も高くなる。

この傾向からすると、II帯を除き、遺跡地もしくはその近傍で稲作が行われていた可能性があり、その規模（面積・密度）と現地性の度合いはVI帯（近代～現代）が最も程度が大きい。

(3) 三田遺跡との関係について

今回明らかとなった軽部池西遺跡における植生変遷を先に行った三田遺跡での植生変遷と比較すると以下の点が指摘される（表8参照）。

①三田遺跡では古墳時代～現代の植生変遷が明らかとなったが、軽部池西遺跡ではこれよりさらに遡って縄文時代後期～弥生時代後期の植生変遷も明らかとなった。

②縄文時代後期～弥生時代後期：この層準は三田遺跡では確認されなかった層準である。これより後の古墳時代以降にくらべ、低地部にはカシ林（照葉樹林）が卓越し、周辺の丘陵・山地部にはモミ・ツガ・スギ・コウヤマキ林（温帯針葉樹林）が分布していた。また、少ないがイネ科（>40）が出現することから、縄文時代後期には遺跡近傍でイネの栽培が

軽部池西遺跡

三田遺跡

時代	花粉帯	時代	土層区分 B(1)地点	土層名 B(1)地点	花粉帯
近代～現代	VI	現代	第1a層 第1b層	耕作土 床土	IV
(古墳～近世)	V	近世	第3a層 第3b層	耕作土 床土	III
弥生時代 後期	IV	中世	第4a層 第4b層	包含層 包含層	
	III		第5層	床土	II
縄文時代 後期	II	古墳	第6層 第7層	包含層 基底層	I
	I		第8層	地山	
縄文時代前期末 ↳ 縄文時代中期初					

表8 軽部池西遺跡と三田遺跡における花粉帯の関係

行われていた可能性がある。この点に関するより詳細な検討のためには植物珪酸体分析による「イネ」の存在確認が望まれる。

③古墳時代～近世：三田遺跡において土層の大半を占める層準である。軽部池西遺跡では遺物等からこの層準に特定できる試料（土層）は無いが、No.9地点の試料No.22とNo.10地点の試料No.29の2試料は花粉組成の特徴からこの時代に当たると考えられる。2試料のうちNo.10地点の試料No.29の花粉組成の特徴は、イネ科（>40）の産出頻度が低い点とソバ属が検出されない点を除いて、三田遺跡のB(1)地点の試料No.6（第4b層・中世包含層）のそれと非常に似ており対比される可能性が高い。

④近代～現代：軽部池西遺跡、三田遺跡ともにアカマツ・クロマツ林の二次林と植林と考えられるスギ林が卓越する。またイネの栽培も行われていたが、イネ科（>40）の産出頻度から、軽部池西遺跡は三田遺跡にくらべてその規模ないし現地生の度合いが低いと考えられる。

C) 堆積環境

珪藻分析は化石が検出された試料が5試料と限定されているために、詳細な堆積環境を追跡するに至っていない。

また、分析対象の試料が純粋な水域堆積物ではなく、二次堆積物もしくは人為作用を受けた堆積物であるために、検出された珪藻化石群集がどの段階に生成埋積したものであるのかには問題が残る。

特に、各地点から相当数が検出された海水域の種類は、現在の遺跡の標高（およそ T. P. 21m）から考えて当時海水の影響がおよんだとは考えにくく、河川後背流域に分布する大阪層群の海成層からの二次化石である可能性が高いと考えられる。

また確認された珪藻化石群集にはいづれも酸性の小規模（水深・面積）な水域で生活する種類を含んでおり、降雨の影響を受けやすい「水たまり」的な環境も想定され、このことは花粉化石群集から推定される水田耕作地ならびにその周辺の草地の植生環境と矛盾しないものである。

従って、珪藻化石が検出された土層においては、水田、水路、小池などの堆積環境が類推され、そこへは後背に分布する大阪層群の海成層から洗いだされた二次化石を多量に含んだ水が供給されていたと考えられる。

図

版